
飽くなき赤色-Red Fraction-

秋折紀織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飽くなき赤色 - Red Fraction -

【Nコード】

N6197C

【作者名】

秋折紀織

【あらすじ】

この物語は、飽くなき赤色を読み終わっていると楽しく読めると思います。同作者作品から『飽くなき赤色』に飛んでみてください。『飽くなき赤色 - Red Fraction -』では、スピンの的なモノを書いていくつもりですが、時系列はバラバラで、『飽くなき赤色』より以前の話もあれば後日談的な話もあると思います。

#01: I - n v i t a t i o n (天才と少年) (前書き)

『飽くなき赤色』を読んでいると幾分楽しめると思います。
長いです。こつこつ過去話とかは分けられない方がいいと思いますので。

#01: Invitation (天才と少年)

開かずの扉を開けるのは、いつだって規則を守れない人間だ。

飽くなき赤色 - Red Fraction -

『ドルーセン大統領子息、一命を取り留める。危篤の子息を救ったのはXX大学付属病院』

見慣れた英字で大きく書かれたその見出しを一瞥し、テーブルに放り投げて私はベッドに倒れこんだ。

昨日は突然の大手術でしかも徹夜で術後経過を見ていた。やっと家に帰ってこれたと思ったら既に昨晚のコトが新聞で取り上げられていた。

情報の伝達速度はホント、素晴らしい限りだ。

……肝心なトコロをボカすのもホント、上手だ。

誰が信じるだろう？ 大統領子息というVIPを、しかも大怪我で虫の息のトコロを、私の様な日本人の小娘が救ったなどと。

どうせ雑誌のインタビュアーや、テレビの記者会見では院長が我が物顔で誇らしげに語るのだろう。

『私の病院だからこそ助けるコトが出来たのです』と。

別に私は手柄が欲しいのではない。下らない体裁や面子を気にして平気な顔で嘘をつくのが気に入らない。

聖人君子のような微笑みで人の命を助けたいと語りながら、その内面は悪魔使徒のように邪悪な念が渦巻いているのだ。

今更、人間という醜い生物を否定するつもりはない。

だが、同じ人間だからこそ、嫌悪感を抱いてしまう。私も結局は、邪念の持ち主なのだろう。

眠気で呆ける頭が思考だけを回し続けるのを感じながら私はうとうと眠った。

×××

「……お前が僕の手術を？」

「ええ、そうです。ご不満でしたか？」

「ジョークにしては少し不愉快だね。死に掛けた僕にそんな冗談を言うなんて何様のつもりさ」

「『お医者様』ですよ。お坊ちやま。人の立場は千差万別で人の命は不平等ですが、患者と医者という関係は変わりません。

あまり医者には逆らわない方が、お体のためですよ」

高官病棟。その最上階で最上級の病室。病院をリゾートホテルか何かと勘違いしてそんな部屋。

そこに現在、例の大統領子息が入院している。年は15。色々と言っちゃな年頃なのだろう。

「口の利き方に気をつけるよ。僕の一言でお前の首は簡単に飛ぶんだぞ！」

「あああら。では、私の首が飛ばされる前にお坊ちやまの首を物理的に飛ばしてしまおうかしら？」

「ッ！」

「ジョークですよ。お坊ちやま。大統領子息であるのなら懐の広さをもっと示して下さいな」

「ふん！ 本当にお前が僕の命を救ったのか！？」

「ええ。何でしたら手術記録をお持ちでしょうか？ それとも坊

ちゃんの傷と体内について詳しくご説明でも？」

「う……い、要らないよッ。それより、僕がこんななのにお父様は何で来てくれないんだ？」

お父様……つまり、現大統領か。

「お仕事だそうですね。政務が忙しいとか。一段落したらお見えになると聞いてますが」

「……そっか。じゃあ来ないってコトか」

「……………」

ありがちな話だ。仕事で時間の取れない親とそれに寂しさを感じる子供。

ありがち過ぎて呆れる。大統領だろうがサラリーマンだろうが、日本だろうがアメリカだろうが。

そんなコトはありがち過ぎるんだよ。

「ではお坊ちやま。検温しますので上着を失礼しますね」

「うわっ、自分で出来るよ！」

「それは失礼しました。では脱いで頂けますか」

「……その『お坊ちやま』って止めてよ。何で同い年ぐらいの女にそんな風と呼ばれなきゃいけないんだよ。

っていうか、お前ホントのホントに医者なのか？ 中学生が医者っ

てどんな魔法だよ」

「……。私は、これでも20です」

こつちに来てからもう随分と言われ慣れたが、こんな子供にまで言われると少しクモるモノがあるなあ。

そんなに童顔のつもりは無いのだけど、外国人は日本人の年齢が解らないって言うし……。

13でこつちの大学に飛び級して、ひたすら勉強だけしてそれで医者になった。

自分でもなんでこんなに生き急いでるのか解らないけど、きつと自分の性に合ったのだらう。

周りからは天才だの何だの言われている。医者になってたった数年

で『悪魔の腕』と呼ばれてしまった。

……嬉しくないわけではないが、やっぱり複雑。

「うっそだー！？ そんな貧相な体してたら僕の学校じゃ相手にも
されないよ！？」

このヤロウ、顔じゃなく体で判断すんじゃないやねえ。

「では体温計差しますね」

「痛いッ」

「あら、すみません。少し手元が狂ってしまいましたわ。やはりお
相手が大統領子息ともなると医者 of 武者震いと言いますか、緊張し
てしまいますわねー」

「お、お前絶対ワザとだろー！」

高官病棟など退屈の極みだと思っていたが、これはこれで悪くな
いのかも。

×××

「キョウ……コ・サ……エギ？ 日本人の名前は難しいなあ」

「私からしたら坊ちゃんの名前も充分難しいですよ。アルフレッド・
バナクラーシユ・ドルーセン君？」

日本には無い、ミドルネームまで覚えるのが大変なのだ。

「アルフでいいよ。学校じゃ皆そう呼んでるし。その代わり僕はお
前のコト、キョーコって呼ぶからな」

「いいですよ。では、アフロ」

「アルフ！」

「失礼。では、アルフ。体調はいかがですか？」

「別にー。体中包帯巻かれて窮屈なだけ」

アルフの怪我はそれはもう酷く、何でも学校から自宅に帰る際に
交通事故にあったとか。

通学は自家用車で行っているらしいが、それがアダになったのだろうか。

まあ歩いて行こうが車で行こうが交通事故にあう確率はそう変わらないのだからうけど。

「ふむ。頭が悪い、と」

「お前僕を馬鹿にしてるのか？ 悪いけど学校じゃ一番の成績なんだからな！」

「へえ、ならアルフ。貴方にこの問題が解けますか？」

ある日ボブが病院に行きました。なんでも息子の調子が悪いそうなのです。無事診察を受け薬も貰い、ボブは家に帰りました。

その話を友達のジャックに話すと、ジャックは不思議がりました。

『僕の記憶が正しければ、君のトコロには娘が一人いるだけだろう？』

さあボブは何故病院に行ったのでしょうか？」

「そんなの簡単さ。ボブの息子って言うのはスラングで

アルフの口が固まり、徐々に耳が赤くなっていく。

「ボブの息子っていうのは何ですか？」

「あ、う、え……………」

続きを促すも口をパクパクと金魚のように動かすだけで声が続かない。

「ああああ。将来アメリカ国民の前に立って演説をするかもしれないお方がその様に顔を真っ赤にして緊張してはいけませんね」

「……………」

ああああ、うふふ。

「では今日の検診はこれで終わりです。明日には答えが言えるといいですね」

「ウルサイ！ キョーコには女としての恥じらいつてというのが無いのか！」

「残念ながら患者さんので見飽きてますので。アルフのも手術の時に……………」

「!！」

「可愛いですね」

「! もう出てけえッ!」

そんな割と楽しい日々が続いた。

×××

アルフが入院してから二ヶ月が経った。

包帯も随分取れてきたし、抜糸も済ませたし、完治までもう少し遊びたい盛りなのか、動けるようになってアルフはしょっちゅう病室を抜け出して私を困らせた。

高官病棟の患者を担当する私としては、そんなVIPから目を離しては責任問題だからだ。

「アルフ、入りますよ」

今日は部屋に居るコトを願いながら病室のドアを開ける。

「また……!」

ベッドはもぬけの殻。また何処かを走り回っているのだろうか。

高官病棟は厳重な警備が敷かれているので、許可が無いと入るコトも出るコトも出来ない。

なので、範囲が病棟内だけで済むのはありがた……い？

ふと頬を撫ぜる風に気付いた。クーラーの類ではない。

見れば窓が開いている。

「まさか……」

窓際に駆け寄る。カーテンで隠れていて気付かなかったが、ベッドのシーツが結び合わされていた。

「ドラマじゃあるまいし!」

シーツは三階のトコロまでしか伸びていない。が、高官病棟は四階からだ。

それに丁度、シーツの終わりのトコロの窓が開いていた。
病院外に逃げ出されたら、不味い……！

私は急いで病室を飛び出す。四階に駆け下り、入り口の警備員に事情を話し退棟許可を得て更に駆ける。

「何処に……」

ひとまず三階まで来たが、まだこの辺りに居るのだろうか？

手がかりも無いので足を使って探すしか無い。

「まったく……これだから世間知らずのお坊ちゃまは」

こちらの苦心も察してくれ。

「……でもまあ。仕方ないか」

この二ヶ月。たった二ヶ月ではあるがアルフの主治医として接してきた。

それだけに彼のコトは多少なり理解できる。

大統領の息子として周囲から受ける様々な視線。重圧。

それは彼だけにしか解らないモノだし、誰かが理解してやれるモノでもない。

ただ、その苦しみを和らげてやるコトは誰にだって出来る。

普通に。彼を一人の人間として、接してやる。それだけでいいのだ。

「居た！」

二階に探しに行こうと階段を降りようとしたトコロで廊下の向こうにアルフが居るのが見えた。

「アルフ！ 自分の病室に戻るわよ！」

いつものアルフなら私が怒鳴り姿を見つけたトコロで更に逃げ出そうとするだろう。

だが、今回は違った。

「……アルフ？」

彼のトコロまで駆け寄ってみる。彼は呆然としていた。何か恐ろしいモノでも見たような……。

「アルフ」

彼の肩に手を置いて、名前を呼ぶ。

「う、うわあ!?! ……キヨ、キヨ……?」

「ええ私です。どうかしましたか?」

「う、ううん。何でも……なんでもない! は、早く行こう。ね。

逃げ出したのは謝るからさ!」

「アルフ……?」

おかしい。アルフは異様に怯えている。何に?

まさか私というコトはないだろう。現にアルフは早く行こうとい
いながら私の腕を引っ張ろうとしている。

「アルフ、この腕の怪我はどうしたの?」

見ればアルフの右腕は血が流れるほどの傷。事故の傷ではなく今
さつき出来たばかりの生々しい傷。

「駄目だよ、キヨ……早く、早く!」

「だから、何が……?」

「早く逃げないと!」

逃げる?

その言葉を疑問に思った瞬間、視界の横から黒い腕が伸びてきた。

その腕はアルフを掴むと、風斬音と共に消えた。

「は?」

その一瞬刹那の出来事に私は何か白昼夢でも見ている感覚を覚え
た。

でも違う。今はそんな場合じゃない。

「アルフは?」

幻覚かと思つた黒い腕。その腕が視線の外から伸びてきた先。

そちらに視線を向けると、普通にドアがあった。

「そっいえばアルフはこのドアを見て怯えていた……?」

ドアに怯えたというよりは、部屋。部屋というよりは部屋の中に
怯えていたのだろうか。

助けを呼ぶべき? そんな場合じゃないのかもしれない。

なら、誰がアルフを助けるのだろうか。

「私しか居無いじゃない」

意を決してドアノブに手をかける。

呆気無いほど自然にドアは開いた。中は暗い。

恐る恐る部屋の中に入っていく。電気のスイッチを入り口近くの壁に探す。

「これ、か？」

カチリ、と軽い音と共にスイッチを入れて部屋に電気が灯る。

「……！ なにこれ」

台風でも通り去ったかのような雑然とした部屋だった。

壁や天井の至るトコロに傷が走り、戸棚はガラスが割れ落ち書類が床一面にバラまかれている。

床の古ぼけた書類の上に赤い斑点が見えた。多分……アルフの血。部屋には未だ奥があった。ドアは無い。

「アルフ！」

無我夢中でその血を辿り、部屋の奥へ駆け入る。

そこには、アルフが居た。アルフト　人のカタチをした『何か』。

『何か』は片手でアルフの腕を掴み、宙吊りにしていた。

力なくダラリとしているアルフはきつと気絶しているだけのハズ……。

『何か』の視線がコチラを向く。『何か』　それは確かに人ではあった。

だけど何かが違う。人として何処かがおかしい。まるで狂人。

「……………」

まるで人語を解さない獣のような叫び。腹の底に響く悪魔賛歌のような。

視線が再びアルフに定まる。そしてそのまま、その悪魔はアルフの腕を『齧った』。

口元がベタリと真つ赤な血に染まる。どこまでも獣を想起させる狂う様を私は遮ろうとした。

「死になさい！」

殺人がどうか、相手が何なのかとか、そんな全てを考える余裕など無く。

ただ生き延びるために、床でのた打ち回る悪魔に銃口を向け、弾全てを撃った。

「ハア……ハア……」

悪魔の血で床が染まった頃、それはピクリとも動かなくなったコトでようやく人として認識できた。

「これ……ウチの患者？」

一般の入院患者と同じ服をソレは着ていた。血や汚れなどであまり様変わりしているの一目では解らなかったが。

動かなくなつたその悪魔の横を通つて、未だ倒れているアルフへと駆け寄る。

傷は、掴まれた時のモノと噛まれたモノだけで、息はしているしすぐに治療すれば全然平気だ。

痛む肩を無視してアルフを抱え、私は部屋を飛び出して処置室へ走った。

x x x

処置を終えて、今は高官病棟最上階。アルフの病室に居た。

アルフの傷は私が処置したし、自分の傷もアルフに手伝ってもらいながら何とか終えた。

他のドクターの手を借りるのは、説明するのが憚られた。

それでも血に濡れたアルフを抱えて走る私の姿は院内で何人かに見られたらうけど。

「……………キョーコ、怒ってる？」

「いいえ。こうして死なずに済んでるんです。それでいいじゃない

ですか」

「ごめんね。僕が病室を抜け出してあの部屋の鍵を開けたりしなければ……」

「大統領の息子がまさかピッキング技術を持つてるなんてとは思いませんけどね」

「……ごめん。『アイツ』……最初は普通だったんだ。」

僕があこの部屋に忍び込んで、アイツは奥の部屋のベッドで縛り付けられてたんだ。

僕が近寄ったら、普通の声で病院の医者にイジメられてこんなトコロに居るって言うもんだから……。

僕可哀想になつて……拘束具を外したら急に壊れたみたいに襲ってきて……。

『アイツ』、僕を襲おうとしたんだけど、ベッドから転げ落ちたり、床の紙に滑って転んだりで……。

それで何とか一度は逃げれたんだけど、廊下に出たら腰が抜けちゃつて。そこをキョーコに見つかつたんだ」

「そう……」

一度はアルフが捕まらなかったのは、きっと急に足の筋肉を使つたせいで上手く動かなかつたのだろう。

それだけ長い間、あの悪魔は拘束されていた……。

「待たせたね、ドクターサエギ」

突然、病室のドアが開かれ、院長と黒服の男が数人入ってきた。

「何でしょうか……!？」

「機密保持だよ、ドクターサエギ。まだ十台だと言うのに優秀な君を失うのは私としても心苦しいのだがね。」

アレを見られた以上、知られた以上、殺すしかないのだよ。

まったく……明日には搬送するはずだったのに、見られてしまうとはね。呪うのなら、自分の不運を呪うのだな。ドクター」

絵に描いたような黒服たちが懐から銃を取り出す。少しでも動けば撃つだろうし、動かなければ死亡時刻が少しズレこむだけだ。

「大統領子息はどうなさるおつもりで……？　まさかこの子も殺すなどと言い出すんじゃないでしょうね」

「殺すさ。オペから二ヶ月が経ち容態が急変。原因は担当医が手術ミスを犯したため。」

結局、大統領子息は助からず、担当医は責任を感じて自殺。

そういうシナリオだ。多少苦しい部分はあるが、なあと情報操作ぐらい幾らでもやってやるさ。

病院の名に傷がつくのは致し方ないが……今度は別の名士の子息を事故に遭わせてまた治療すればいい」

「！　アナタは最低の人間だ！」

「言いたいことはそれだけかね？　日本人は無宗教だと聞くが、神に祈るぐらいしたらどうかね。」

ああ神様、どうか死後の世界では安らかな暮らしを、とな」

「神に祈るのは、アンタたちね」

流行には疎い方だけど、最近は突然の乱入が流行っているのだろうか？

その突然の声に振り向く黒服たち。私たちを殺そうとする場面を見たのだろうから、乱入者を殺すのもまた必然。

何発もの銃声が響く。だが、死んだのは乱入者ではなく、黒服たちだった。

「お疲れ、久世クン」

「別にこの程度じゃ疲れん。それに歩一人でも充分始末できるレベ

ルだろうに」

「まあねー。ほら、でも折角男手があるんだから使わない手はないのよね」

「ふん」

乱入者は男と女。二人とも硝煙の上がる銃を手にしていた。

「な、何だ貴様らは！」

院長が叫ぶ。こういう時悪役の存在はありがたい。訊ねる手間が省ける。

「私はね、ホシムラ アユミ星村歩」

「？ 貴様は何を言っているんだ！？」

「あ、そっかここアメリカだっけ。えーっと……アイ アム アユミ ホシムラ。オーケー？」

「……歩。お前英語出来るんだから、普通に話せ」

「えへへー。ま、いいじゃないの」

そうか。何となく違和感を感じていたが、この二人は日本人なんだ。ここしばらく同郷の人間に会っていなかったので、すっかり鈍っていた。

女 星村歩って名乗っていたっけ。顔立ちこそ日本人だが、金髪で青い瞳だ。遠目にはアメリカ人に見える。

対して男の方は、茶髪に染めてはいるものの完全に日本人然りとした顔。

「……キョーコ」

アルフが私の裾を掴む。未だ15の子供だ。人がバタバタと死んでいくのを見せられて何も思わないワケがない。

……そして、この突然の日本人二人は、私達をも殺すかもしれない。何とかしてアルフだけでも生きて逃がしてあげなきゃ……。私の命に代えても。

腰の拳銃に手をかける。弾はさっきの『アイツ』に使いつつたけど、ハッターぐらいには……。

小声でアルフに囁く。

「アルフ、私が合図したら部屋から逃げなさい。廊下に出たら火災報知機を鳴らしてドサクサで逃げるの。いい？」

「う、……うん」

部屋の入り口近くには、あの二人が立っている。

向こうは銃を持っているし、あの黒服たちを一瞬のウチに撃っている。相当の腕前だ。

それでも、何とか立ち位置だけでもずらして、後は私が盾になればアルフは撃たれずに逃げ出せる。

それでも逃げ切れる保障はないけど……今はそれが出来る精一杯……ッ。

「コホン。えーっと、ドナテロ院長？ アナタにはここで死んでもらいます」

「なッ!？」

「そういうワケだ。大人しく地獄に落ちろ」

乾いた銃声。何の躊躇も無く引かれる引き金。崩折れる院長。

この部屋はすっかり、硝煙の臭いで満ちていた。

「よし、じゃあ次はアナタたちね」

「アルフ！ 走って！」

腰から拳銃を抜く。同時に女の方へ駆ける。

「ほえ？」

駆けながら手の拳銃を男の方へ投げつける。それは容易くかわされるが、そんなのは想定内。

その回避移動によってアルフが逃げる隙間が出来ればそれでいい。

自分でも呆気ないと思うぐらい、簡単に女の腕を掴み拘束する。

手首を捻り、その手から拳銃を離させる。

きっとこの女は何で手首を少し捻られたぐらいで指が離れたのか理解出来ていないだろう。

女の拳銃を奪い、その銃口をこめかみに当てる。

「動くんじゃないわよ！」

男がアルフに手を伸ばそうとしたトコロに怒声を飛ばす。

「お仲間が殺されてもいいの!？」
「チツ」

伸びかけた手が止まり、アルフは部屋から無事逃げ出せた。後は……火災報知機を鳴らして、駆けつけた警備員にこいつらを引き渡す。

それまでは……この女を人質にしないと。

「さっすが、天才ドクター。人体を熟知していないとここまで出来ないよねー」

「黙りなさい! 貴方も……武器を全部捨てなさい!」

男がため息を吐いて、手にしていた拳銃を放る。

「ねー久世くん。どーしよっか。ヘルプミー」

「知るか。説得でも何でもすればいいだろ」

「あ、そっかー」

「黙りなさいって言うてるでしょ!」

銃口を押し付けているのにこの女の緊張感の無さは何だ。それにイライラするが、何とか押し留めようとする。

ここで焦っては、アルフが逃げ切れないかもしれない……ッ。

「えっとじゃあ、お話してもいいですか?」

「喋るなって言うてるでしょ!」

「むー」

均衡。多分そういう状況のハズだ。女も男も私も、身動きできない状態。誰かが動けば誰かが死ぬ。そういう状況。

「あのね。私達、別にアナタを殺そうとはしてないんだけど……」

「そんなの信じられるワケないわ!」

「えー。信じてよー。……アナタ見たんでしょ? 『アレ』。私達

は、『アレ』を保護するために色々してるんだけどお」

「『アレ』って何なのよ……ッ」

思わず問いかけてしまう。

まだ一時間も経ってない。『アレ』に襲われて、『アレ』を殺してから。

「お、喰い付いたね。いいいいよー。『アレ』はね、人の終末点。人が生まれた時から抱えてる爆弾。一度それに火が点けば決して消えないモノ。理性や感情、人格や性格を全て凌駕する感覚。人の最もやりたいコトの塊。」

それを……『衝動』って言うのね」

「……『衝動』？」

「そう。衝動は人によってそれぞれ違うの。もちろん被る人も居るけどね。」

何がキツカケで衝動に気付くかは解らない。でも衝動に気付いてしまった人は、普通の社会じゃ生きていけないのね。」

だから、私達はそういう人を保護するために、色々やってるのね」

「……信じられないわ」

「だが見たのだろう。冴城恭子。『衝動解理者』を」

「衝動……解理者……」

男が紡いだ言葉を繰り返す。

あの悪魔の様な姿をした人間を、衝動解理者というのだろうか。

全ての人間があんな風になる……？

「アナタが見た解理者がどんな衝動を持っていたのかは知らないけど、私達は『行き過ぎて社会から弾かれてしまう』人の居場所を作つてあげたいの。ちよつと綺麗言だけどね」

「厳密には、保護と駆除だ。何も全ての衝動解理者を保護するわけではない。」

中には他人に危害を加える衝動を持つ解理者も居る。そういうモノによる被害を防ぐために殺すコトもある」

「それじゃあ、アナタたちは何故ここに？」

「一つは、ここに隔離されている衝動解理者を保護ないし駆除するため。まあ私達が来た時には既に死んじゃってたケドね。」

でえ、もう一つは、アナタの勧誘」

「……は？ 私……？」

処理が追いつかない。さっきからワケの解らないコトが多すぎる。

「そうそう。私達ってまだまだ人手不足だからさあ、色々と優秀な人を集めたいの。」

それで、若くて日本人で天才ドクターのアナタに狙いを定めたワケ」「いずれは日本政府に手を入れて組織を立ち上げるつもりだが、現状では人が足りていないのでな。」

組織を立ち上げる時点であるべく優秀な人材を集めておきたい」

「どうですか？ 私達と一緒に衝動解理者を助けてみませんか？」

「……そんな、急に言われても」

「ですよー。でも、真実です。自惚れるつもりじゃありませんが、私達が何とかしなければ確実に被害は増える一方です。」

……私は、身内に衝動解理者が出ました。弟です。」

弟の解理した衝動は『殺人』。私はたまたま家に居なくて難を逃れましたが、両親と他の兄弟は皆殺されました。その後弟の消息は知りません。今も未だ誰かを殺しているのか、それとも既に弟は死んでいるのか。だから、これ以上、衝動による被害を出したくないんです。それを食い物にする人間も許せない。」

それに普通の人は衝動のコトを知りません。知ればそれだけ衝動に気付きやすくなってしまふから。それをいいコトに、非人道的な人体実験に解理者を使うような人間も居ます。この院長もそうです。」

衝動は解理するだけで本能に体が近づき、人間離れた力を持ちます。それでも、基本的に人体であるコトに変わりはないので、危険な新薬を投与したり、生きたまま解剖したり……。」

そういう組織が確実に存在しています。」

私達だけで全部の解理者が救えるとは思っていません。」

だけどせめて、自分の国である日本の中だけでも、解理者が人として過ごせる環境を作りたいと思っています」

女の話に、私は自然と押し当てていた銃を下ろした。理解できるできない以前に、信じるコトが出来ると思ったから。」

……今更になって、肩の痛みを思い出す。」

私もアルフもたまたま殺されずに済んだ。だけど、殺される人も

いる。私だつて世界中の理不尽に死にいく人間を全部助けられるなんて思つていない。

「だけど……あの暴力に殺される人を少しでも減らせるなら。」

「信じるわ。……理解は未だ出来ないけど、あなた達に協力したい」

この突然の勧誘を受けるコトにした。

知つてしまったのなら、見なかつたコトにはしたくない。

衝動というモノが治せるならこの手で治したいし、それが無理なら少しでも苦しむ人を減らしたい。

医者として。私として。

「良かったー。断られたらどうしようかと思つちやたのよね」

「……別にどうもしないだろ。そうやって無駄に恐怖を煽るな」

「え？ 何が？」

「天然め」

「ふーんだ。それじゃ、よろしくね冴城恭子サン。私は星村歩ホシムラ アユミ」

「……久世克樹クセ カツキだ」

「私の自己紹介は……… 必要ない、か。そういえば、アルフは………？
そういえばすっかり忘れていた。アルフには悪いが。廊下に出て、それからどうなった？」

「はーなーせー！」

「やっと終わったのかよ。ったく、ずっと抑えておくの大変だったんだからな」

また新たな男が現れた。その男はアルフを捕まえていた。

「キョーコツ！ 早く逃げて！」

「……アルフ、もういいんだよ」

「キョーコ？」

x x x

歩たちに出会ってから一週間。色々準備を終えて、私は死んだ。実際には、病院に行く途中に交通事故で橋から川に落ちて行方不明で感じたけど。

今は軽い変装をして空港に居る。これから日本に行くために。

歩や久世君の他に志を同じくする人が居るといので、彼らに会いに行くのだ。

「キョーコ……」

「見送りありがとう、アルフ。でも、あんまり目立つちゃだめよ」

「解ってるよ……。キョーコ。もう会えないんだね」

「そうね。私は死んじゃったしね。アルフは次期大統領だから死人なんかと会えないしね」

「……うん。僕が大統領になったら、キョーコたちの組織のバックアップしてあげるからね！」

「それは頼もしいわね。それじゃ、アルフが無事当選したら、手紙を一つだけ送ろうかしら」

「約束だよ」

「ええ、約束」

私達は互いに微笑む。割と短い付き合いではあったけど、楽しかった。

お互いにそう想えている。

「アルフ。元気だね」

「キョーコもね！」

何て事のない別れ。ちょっと背伸びをしすぎた天才と、ちょっと偉いだけな年相応の少年。

鞘朽が出来るのはそれから少ししてから。

冴城恭子他、七名。

その全てが揃うのに、また一波乱あるのだが、それは別のお話。
この七人が偶然と必然の元に揃わなければ、鞘朽は存在しなかつただろう。

決して、正義や悪といった組織ではないけれど、鞘朽があるコトによって救われた命は確かに存在するのだ。

#01: Invitation (天才と少年) (後書き)

どうも、秋折紀織です。

いかがでしたでしょうか。飽くなき赤色・Red Fraction
n・第一話。

今回は冴城恭子の過去話でした。

正直、拙いところ多いと思います。

気付けば会話ばかりだったり、変な地の文が入ってたり……。
ちよっと長くなるとすぐダレるのは俺の悪い癖。

ってゆーか、アメリカのコトとかよく解らないから！

感想、批評、野暮な突っ込み、作者が気付いていない矛盾などあり
ましたらぜひどうぞ。
では。

#02: Meaningless (無意味にいう) (前書き)

物凄くどーでもいい感じで、尚且つ無意味で、更にご都合主義すぎるお話を一つ。

#02: Meaningless (無意味にいう)

刀の錆にしてやるぜ。
でも、錆びる前に手入れするけどな。

飽くなき赤色 - Red Fraction -

「ゾロゾロとまあ、蛆虫みたいに湧いてきやがってよお」
「欠かさず手入れしてきた愛刀を握る左手に力がこもる。」

目の前には、俺にとってのゴチソウがずらりと並んでいるからだ。
「全部、血染めの塵芥に変えてやる」
右手を柄に添える。

まだ 踏み込むには早い。

まだ もう少し引き付けてから。

まだ すっかり取り囲まれ相手が武器を構え 今だ。

「シッ！」

刹那に光る剣閃。まさに光速の速さで敵を断つ。

斬り口から血が数瞬遅れで吹き出し、力尽きた雑魚共が地へと倒れ伏す。

「さあて、次行こうか」

返り血が顔に掛かるが気にならない。

何人死のうが、何人殺そうが関係ない。殺す相手が『悪』である限り俺に躊躇いは要らない。

そう。今、鞘朽を襲っている無数の大勢は、『悪の軍団』だ。
それを迎え撃つ俺は、『正義の味方』。

悪を斬るだけの、存在。

「そらそらそらアッ！！」

片っ端から斬りつける。足を止めず、手を止めず。動く敵全てを斬る。

「呆気ねえな」

数分駆け抜けたトコロで、一度敵の手が止まった。仕方なく俺も手を止める。

周りを見渡せば、屍の山だった。こういうのを死屍累々って言うんだっけか。

刃に付いた血を一払いして飛ばし、紙で拭う。綺麗になった刃を鞘に収める。

「ふう……もうちょっと強いのが欲しいよなあ」

「死ねエ！」

「！」

背後からの一撃。それに反応して柄に手をかける。居合いを舐めるな。充分に間に合う速度だ。

振り向くのと抜刀するのはほぼ同時。敵を視界に収めながら刃を滑らせる。

その俺の眼前に、一筋の黒線が見えた。が、気にしている暇はない。

結果、背後から襲ってきた敵を両断する。

その横数メートル先で、呻きと共にドサツと倒れる音がした。

「油断大敵ですよ？」

硝煙の上がる銃を手にした女が木陰から現れる。……鞘朽の人間か。

「余計な手出しだ。気付いていたし、銃弾ぐらい避けれる」

女が撃つたのは敵の伏兵で、背後から襲ってきたヤツにあわせて俺を撃つつもりだったのだろう。

気配には気が付いていたし、斬りつけた後コンマ数秒で動けば銃弾ぐらい回避は出来る。

「へエ。これを見てもそんなコトが言えるの力ナあ？」

「あん？」

「コイツが持つてるヤツ、手榴弾と散弾銃ダヨ。短射程・広範囲な武器じゃん？」

いくら解理者の体力を以ってしても簡単には逃れられなかったと思うケドなー」

「……不可能ではないだろうが、実際使いようによっては厳しいか。解った。素直に感謝しておく」

「お、意外に正直者なんだね」

「命を救われてやさぐれるほど、腐ってないつもりだからな」

「さようですかー。あたしは古幹実子コノキってゆーんだけど、アナタは例の十叶君トカノウでいーんだよね？」

例の…… ああ何か神原の後釜って感じで注目されてたんだっけ。

任務に従事出来る解理者は珍しいからとかなんとか。

「そうだな。じゃあ、俺は次行くから」

「ええー折角だから、ご一緒させてよ」

「なら、射程に入らないように気をつけてくれよ。誤って斬ったらシヤレにならん」

「おお、意外に優しいんだね」

「何でもかんでも『意外』って付ければいってもんじゃねえぞ」

「あはは。まあ遠目の見た目じゃ、随分つつけんどんな感じだったからさあ、ついついねー」

「……さようですか」

「あ、それ私のマネ？ 意外に面白いトコロあるのねー、って！

「……まさか、言わせた？」

「さあてね」

「次にお前は『意外に』と言う！ なんてね。うーん、あたしって解りやすいのかなあ」

「……」

解りやすいな。色々。

「それじゃ、鞘朽が無くならないようにしっかりと守りますか！」
……………そうか。

「……………そういう見方も出来るのか」

「うん？」

「いや、何でもない」

さつさと別の戦闘地帯へ向かう。一部隊を小分けに攻めてきているようで、とにかく範囲が広い。

鞘朽の敷地が広いせいもあるが、敵もそれに見合った十分な数を用意しているというコトか。

「……………で、何でお前はそんなにくっ付いてるんだ」

「え？」

一応、周囲の警戒をしながら怒声や剣戟音、銃声のする方へと向かっている。

で、何故か俺のすぐ隣には古幹という女。

「あ、もしかして女性恐怖症とか？」

「そんなもん無い」

「そっかー。じゃあいいじゃん？」

「さつき言わなかったか？ 射程に居ると斬るかもしれないって」

「……………んー、斬らないと思うけどなあー」

こいつ馬鹿か？ 事故があるかもしれないと言っているのに、斬る斬らないは関係ないだろ。

「そ・れ・に。あたしはなんとなく十叶君の傍に居たいなあ、なんちゃって」

「……………アバヨ」

「うにゃ！ それは酷いってモンですよ！」

「戦り辛いつたらありやしねえ。コンビ組むのは構わないけど、お互いもつとやり易い距離を取れよな」

「……………うーん。それはそうだけどあ」

ピピッと電子音が鳴った。連絡用無線、俺のではなく古幹のだ。

「ハイハイーっと。こちら、古幹デスマスヨー。……………あゝハイハイ。

了解しましたッ。十叶君と一緒に向かいますねー」

通信が終わる、多分指令棟からだろう。

「とゆーわけでえ、あたしと十叶君は、味方の窮地を救いに行きま
す！ オツケー？」

「……………おっけー」

「わお、十叶君ってば意外にノリがいいのねー」

「……………意外ってレベルじゃねえぞ」

ふん。自分でも可笑しな感じた。原因は解ってる。古幹につられ
てるんだ。戦闘の高揚感も手伝ってのコトだろうけどな。

……………自分で言うのも何だが、解りやすい男だな、俺。

解理する前はそんな感じだった気もするけど、解理してもそこら
へんは変わらないのか。

「で、位置は？」

「えっと、こっちだよー」

確かに古幹が指差した方でも戦火が見える。ここからでは確認出
来ないが通信に寄れば鞘朽側が推されているのだろう。

「よし、パパッと片付けるか」

「ハイヨー」

俺と古幹は、そこへ向けて走り出した。

x x x

「テメエで最後だッ！」

劣勢を何とか盛り返し、敵の最後の一人を袈裟斬りにした。

「ん？」

何かの気配を感じて空を見上げた。気になったのは私室棟の屋上
の近く。

空を一筋の何か走っていくのが見えた。多分、銃弾。射線を鑑

みるに屋上の誰かを山の方から狙撃したのだろう。

撃つたのは多分、姫香ちゃん辺りか。

……聞いたトコロによれば、姫香ちゃんは神原が鞆朽に来てから飛躍的に強くなったという。

幼い頃から鞆朽に居て、戦闘訓練を受けてきたが、才能が開花せずあの年でようやく前線に出れるようになったと言うが。

神原とパートナーを組んでからは、それはもう恐ろしいまでに腕が上達したのだとか。

……まあ俺には関係の無い話ではあるのだが。

「おい、十叶君やーい」

乱戦に紛れてはぐれていた古幹が俺の元へと駆けて来た。

「さつき通信が入って、敵部隊の頭が墜ちたから後は敗残兵とか諸々の処理だつてサ」

「了解」

いつも通りに、刃を綺麗にして収めてから、歩き出す。

「ねえねえ、あたしの華麗なる活躍見てた？」

「さあね。見てたような見てなかったような……」

「むー」。蝶の様に舞い蜂の様に刺すって言葉が似合うぐらいの華麗っぷりだつたんだから！

「年なのか？」

「加齢じゃないッ！」

ふむ。まあ、見ていたと言うか目の端には映っていた。

てつきり狙撃タイプのガンマンだと思っていたが、銃を持ちながらの近接戦もこなすようで。

こう、殴るように撃つ！ って感じた。精度も中々。結構強いのではないだろうか。

「そうだな。悪くないかもな」

「何が？」

「古幹のコト。懐に潜り込むガンナーなんて随分珍しいなと思って」

「え、え、そう思ってくれるの？」

「ああ」

「やったあー！ あたしねえ、いつつも注意されてたんだよお、訓練の時とか。『銃はそうやって使うモノじゃねえぞ！』って。

でもいいじゃんかねー。自殺する時だってこめかみに銃身を付けるでしょ？ だって、その方が確実に死ねるもんね。

だったら、他人を殺す時でも銃身を近づけた方が死に易くなるじゃんか。だっていうのに、あの担当教官のジーサンときたら……！」

「……だから、それを俺が評価してるんだから、いいだろ」

「ん……まーね。へへっ、ありがと」

隣を歩く古幹は心底嬉しそうだった。その笑顔のなんと可愛らしい事……。

サラツとしたポニーテールが、その笑顔をより一層引き立てているというか。

んー。やっぱり俺って惚れっばいのかなあ。

「なあ、古幹。よかったら、俺のパートナーになつてくれないか？

あー、古幹のパートナーが今、居なかつたらでいいけど」

「ほえ？ んー、あー、えっとー。それって性的な意味で？」

「ああもちろん、性的な意味……じゃねえよ！」

「ああ、制敵な意味でか。つまり、戦闘時におけるパートナー？」

「そういうコトだよ。で、居るのか？」

「んーん。居無いよ。でもさ、十叶君、あたしでいいの？」

「むしろ、古幹じゃないと嫌かもな」

「ウフフ。そこまで言われて断つたんじゃ女が廃るってモンよねー。

それじゃあ、よろしくね。十叶君」

「こちらこそ」

そんなコトが、鞘朽襲撃の当夜にあった。

x x x

「思えば、あの時あたしが哉治君を助けたのがキツカケなんだよね。感謝してよー？ 命の恩人だから、あたし」

「さようぞ」

鞘朽、私室棟。俺の部屋。……ベッドの上。

「むうー、何か言葉に誠意が感じられないなあー。さっきまでみに心に心を込めてよー」。

『実子！』

ぞ！』って感じでー」

「……お前って、意外に痴女だったんだな」

本邦初の伏字だ。姫香ちゃんできえ、伏字になるような発言は控えていたというのに。

「それはあ、哉治君が開発したからだよねえ」

「また際どい発言を……。伏字にすべきか迷うんだけど」

「それじゃ、^ビとか、^ビとかあ、^ビなんてどうかな？」

「全部、伏せられてるな」

「あはは。でも、これは言ってもいいよね？」

「何だ？」

「哉治君、^{スキ}だよ」

「……」

まああれだ。そういう引き金になりうる言葉も伏字の対象らしい。だってそんなコト言われたら、また……。

「そういうわけでえ、ここから先は大人の時間」

「さようぞ……」

ボタン！

何の前触れも無く、部屋のドアが開く。

「十叶君！ 神原秋介が目え覚めたって！！」

あ、

「『あゝ』じゃねえよ。いい加減、空気読めるようになれ。……鍵かけなかった俺も悪いけどよ。」

大体、神原とかどーでもいーから」

部屋に飛び込んだきたのは、最近鞘朽に拾われてきた倉山翔^{クラヤマ ショウ}。

こんなトコロで初登場し、今後出番があるかどうか解らない人物だ。名前も必要なか判断しかねる。

特技は、空気を読まないコト。欠点とも言う。というわけで、残り少ない出番を散らしてやるう。

「解ったからさっさとドア閉めて出てけ」

「し、失礼しましたー！」

脱兎の如く駆けていく翔。だから、ドアを閉めていけと言っただろうが。

「興が削がれたな……」

「そーねー」

実子と顔を見合わせる。

「……仕方ない。折角だから、涼原……じゃなかった、神原の見舞いに行つてやるか」

あの時の襲撃で、瞑主側の指揮官を倒した際に負った傷のせいでずっと眠りっぱなしだった神原。

姫香ちゃんが献身的に世話をしていたし、冴城さんも割りと目をかけていたみたいだったから、俺は殆ど顔を見せていないが。

……ふん。約一年、か。姫香ちゃんを待たせていた分ぐらいは愚痴っといてやるか。

「たまに間違えるよね、神原秋介の名前。どうして？」

「初対面で名乗られたのが『涼原秋介』だったんだよ」

「ふーん。ね、あたしもお見舞い行つていい？」

「……別にいいけど。乗り換えるとかナシだぞ？」

「イヤイヤ無いから。哉治君って意外に」

「臆病つてか」

「違う違う。意外に、愛し尽くすタイプなのね」
「……さようですか」

鞘朽には鞘朽の日常がある。

それは、『外』から見たら、歪で壊れかけに見えるかもしれない。
だが、鞘朽に生きる俺達にとっては、ココはとても生きやすい場所。
幸福の満ちる場所。

幸福なんて人それぞれ。

他人から見れば不幸でも、当人にとっては幸福なコトもある。
幸福論を押し付けるのは、聖者だけで充分だ。

俺には俺の幸福のカタチがある。

実子には実子の幸福のカタチがある。

姫香ちゃんにだって。

神原にだって。

#02: Meaningless (無意味にしよう) (後書き)

どうも、秋折紀織です。

というわけで、ミーニングレスな十叶哉治のパートナー成立の瞬間でした。

故に本編には全く関わりの無いお話。

秋介が屋上で若菜と戦っている間、コイツは女の子とイチヤイチャしていたというだけのお話。

十叶の性格がなんとなく自分の中でハッキリしてきた気がします。

解理してようがしてなかるうが、意外に相手に合わせるタイプなのですわ

意外でも何でもない気もしますが。

空気読めない倉山翔くん。この先出番があるかは本当に未定に、しても。

十叶は秋介と違って、他の鞘朽のメンバーともそれなりに交流があるみたいですね。

下手すると、秋介よりよっぽど主人公らしいのかも。

感想、批評、などなどありましたらぜひどうぞ。
では。

#03・・・Cadenza（音の無い詩）（前書き）

過去話になるべく一つにしたかったけど、どうにも長くなりそうなので二つに別けました。

#03:C - a d d e n z a (音の無い詩)

それはもう随分と遠い日の詩。

飽くなき赤色 - Red Fraction -

「修学旅行ねえ……。あんまり興味無いんだけどなあ」
「なあーに言っただよ。もうちつと喜んだらどうだ？」

いつもとは違う環境、自然と解放的になる空気、気になるあの子の心もオープン！

さあ、君の心の隙間を僕が埋めてあげる、ぜ！」

「……どうしてそうも恥ずかしいセリフを思いつくんだ、お前は？
っていうかソレ、夏休み前も同じようなコト言ってたな」

夕暮れの日が差す放課後の教室。六限目のホームルームで配られた修学旅行に関するプリントを見ながら、俺達は駄弁っていた。

部活のあるヤツは教室を飛び出すように出て行ったが、その他のヤツはまだちらほら残っているみたいだ。

やはり俺達と同じように来る修学旅行に心浮かれているみたいだ。
「に、しても旅行先は沖縄か。あんまり遊ぶ様なトコロ無いだろうに」

「そーかー？ ギリギリ海で泳げるんじゃない？ 九月つっても沖縄なら暖かいだろ」

「泳ぎたいのか？」

「そりゃあね。白い砂浜、日差しにキラキラと輝く透き通ったブルーオーシャン！」

波間に揺れるのは女心とその豊満なおっぱい！　って、あ、おい！

俺を置いて帰ろうとするなよ、秋介え！」

付き合っけられるか。机に引っ掛けていたカバンを持って俺は席を立った。

後ろから慌てて駆けて来る若菜の足音を聞きながら、再来週には見るであろう沖繩の景色をぼんやりと夢想する。

……………暑そうだな。

「あー、お前暑い嫌いだなもんな」

廊下に出たトコロで若菜が追いついてきた。俺のつぶやきを聞かれたらしい。

「寒いのも嫌いだけどな」

「じゃあ春は？」

「俺は平気だが、周りが花粉症やらでウルサイから嫌い。花見とか宴会とかでもウルサイしな」

「じゃ、秋は？」

「……………嫌いじゃない」

むしろ好きだったりする。

「食欲の秋って言うもんなー。もう少し秋が深まったら色々喰いに行くかー。もちろん、秋介のおごりで」

「む…………。まあ、奢るのはやぶさかじゃない。けどな、その代わりに

お前のツケはほとんど溜まってくぞ」

「へへん。そこらへんは出世払いつてコトで」

「期待せずに…………いや、期待して待つておくよ」

話しているうちに玄関に着いた。上履きを仕舞って革靴に履き替える。

若菜は、スニーカーに履き替えている。

「俺、革靴履くと足が痛くなるんだよ。よくそんなの履いてられるよな」

「慣れだよ、慣れ。俺だって最初は歩き辛かったけど、今はもう全然平気だ」

「俺も買つかなあ。でもメンドくさいなー」

夕暮れの空の下、帰路につく。

若菜はスニーカーのままでもいいさ。お前はいつも石コロ蹴りながら帰るからな。

そんなんで、革靴なんか履いてたらすぐに痛んじまう。

だから、そのままでもいいと思うよ。

x x x

「いやっほう！俺は今、空という名の天空へ飛び立つぜ！」

天空と空の違いは何だ。

「おい見ろよ秋介！雲と海が見えるぜ、空は何処行っただー？」

お前の頭の中がお空だよ。

「……………」

？

やっと沖縄に着いたか。何時間ぐらいたったかな。飛行機だとそう遠くない錯覚に陥る。

「しゅっすけ……………気持ち悪い……………」

せんせー、仲谷君が気持ち悪いそうです。ってそんな場合じゃねえ！

「おい、若菜歩け！俺が連れてってやるから！」

「はあー……。すつきり、すつきりー」

「あんだけ機内で騒いでりゃ、気分も悪くなるわな……」

「いやー悪い悪い。ま、でも秋介のお陰で助かったぜ、サンキューな」

「まあいいけどさ。ほら、集合場所行くぞ」

到着早々忙しいヤツだ。でも嫌気は差さない。相手が若菜なら寧ろ楽しいぐらいだ。

その日はクラス単位で幾つかの名所を巡った。

名前だけなら知っているのも幾つかあったが、実際に見てみるとやはり感じるモノがある。

若菜は終始、物珍しいモノに騒ぎどおしだったが。

「ちえー、やっぱり学校の借りるホテルなんてのはシヨボシヨボだな」

一通り終わって、今晚泊まる部屋に入った。ようやく一息つける。

若菜は部屋に文句をいいながら、自分のベッドに飛び込んでいた。

「ふつかふかー……。かな？」

「知らん。俺に聞くな」

「んーイマニ」

「イマイチどころか、イマニか」

「じゃあイマサン」

「どんどんランクが落ちてるな」

若菜が、庭で走り回る犬が炬燵の中でくつろぐ猫みたいになっている。

つまり非常に形容しがたい。敢えて言うなら、ベッドと抱き合っている感じだろうか。

……何か若菜に毒されて変なコトを考えるようになったな。俺も。

「さて、晩飯まで自由時間か。どうする？」

「……………」

「寝てるし」

仕方ない。若菜は晩飯まで寝かさせて、少しコンビニでも行ってくるか。

×××

「あー美味かったー」

午後8時。ホテルのレストランで晩飯を食べ終わって部屋へ戻ってきた。

「ゴーヤってああいう味がするんだな。喰ったコトなかったから知らなかった」

「だよなー。苦瓜って書くぐらいだから、苦いって思って敬遠してたけど、苦味が美味かったよな」

晩飯は沖縄名物、ゴーヤチャンプル。他、ソーキやら何やらと沖縄料理の代名詞的なモノばかりりのバイキング形式だった。

「ちゃんぶるー！」

「はいはい」

「ちゃんぶるううー！」

「射るぞ、コラ」

「突っ込みが解り辛えーよ、秋介」

若菜にダメ出しされた。

その時、部屋のドアがノックされた。

「何だ？」

若菜はベッドでグターっとしていたので、仕方なく俺が出る。ドアを開けると、そこには同じクラスの女子が立っていた。

「どうかした、萩野さん？」

「んー。私は別にどーもしないんだけどさあ。神原さあ、九時になつたら一階のロビーんとこ来てくれない？」

「俺？」

「そ、一人で来てね。そんじゃそれだけだから」

そう言つて笑顔で手を振りながら萩野さんはおそらく自分の部屋へ帰っていった。

首を傾げつつドアを閉める。

戻ると若菜がベッドの上でニヤニヤしていた。

「お呼び出しっすか、秋介くん？」

ひっじょーに嫌らしい笑みだ。

「さあね」

「今の声は、萩野だよな。そっかあ、萩野かあ。結構レベル高いじゃん」

何のレベルだ。何の。

「……………」

九時まで後四十分ぐらいか。その間ずっと若菜に弄られそうだなあ。

こういう時の若菜はノンストップでフルアクセルだもんなあ。

ハア……………。

x x x

「じゃあちよつと行つて来る」

「おう。ゴムは持ったか？ そのまま流れでヤっちまうとかになつたら必要だかなー」

「なるかッ！」

後ろ手に勢いよくドアを閉めた。まったく、若菜は。まったく！腕時計の差す時間は、九時五分前。

言われた通り、一階のロビーに行ってみる。フロントから少し離れた椅子に座ってまってみる。

フロントに従業員が一人居るだけで、他には誰も居なかった。ほどほどに広いせいかやけに静かに感じる。

しばらくして、九時丁度。拙い足音と共に女の子が一人やってきた。

「あ、あ、あのッ。神原君、待たせてごめんなさい」

「あーうん。いや、俺も来たトコロだし」

やってきた女子は萩野さんではなかった。そういえば萩野さんは面倒見のいい性格だって誰かが言ってたっけ。

「んー、外出よっか」

ロビーの裏口から外に出る。そこは直接砂浜に繋がっていて、闇闇に波の音が響いていた。

なんていうか、随分とドラマ的なシチュエーションだなあ。

背後の足音を聞く。一応、着いてきてるみたいだ。

……この女子

サカホキ コスエ
坂祝梢さん。

萩野さんと同じくクラスメイト

の女子だ。

悪い印象は皆無。目立つような人ではないが、よく気が利くと評判だ。

「あの、神原君。ごめんね、こんな時間に呼び出して。仲谷君とかと遊んでる途中だったりしたら……」

「あー、いいよ別に。何かしてたトコロを抜け出してきたワケじゃないから」

「そ、そうですか……」

しばらく沈黙が続く。

坂祝さんは手を胸の前で握ったり、指を絡めたり、深呼吸したりしている。

……緊張してるのか。俺なんか相手に。

「あ、あのッ！」

「ん」

「えっと、その。……私、神原君のコトが好きなんですッ！ いつも学校で会う度に、その……思っていました……」

搾り出すような声。懸命に必死に感情を吐露するために震える喉。

……暗闇に波の音が響く。

修学旅行前に若菜が言ってたっけ。気になるあの子の心もオープン……だっけ？

それがこの状況を作ったって感じだろうか。シチュエーション的には最高だ。

夜の浜辺で二人っきりの男女。恋の告白するのに最高のセットイングだろう。

それが高校生に相応しいのかどうかはさておくが。

「ごめん」

「ッ……！」

元より赤かった坂祝さんの顔が更に少し赤みを増し、目元に涙が浮かぶ。

「俺さ、あんまり恋愛事とか考えられないんだ。坂祝さんが俺のコト好きなのは嬉しいけど……きつとその想いに応えられない。」

俺なんかと付き合っても多分ツマライよ。……だから、ごめん」
言ってる自分が少し憎たらしくなる。言葉は全部本音だ。だが、

本音なだけに更に嫌気がさす。

気障ったらしいのは自覚してる。それでもあんまりだろうよ。

だからってここで安易に『ありがとう、付き合おう』なんて返事を
するわけにもいかない。

俺にその気が無い以上、なあなあで付き合うのは彼女を今後余計に傷つけるだけだ。

そんな風に時間を無駄にさせるぐらいなら、早いトコロ俺を諦めさせて他の男子を好きになればいい。

どう考えてもその方がいいはずだ。

「……そう、ですか」

坂祝さんは完全に俯いてしまった。泣かれてしまったらどうすればいい？

慰めるのか。それはあんまりだろう。フられてしまった女子をフった男子が慰めてどうする。

だからといって放置するのも憚られる。

若菜だったら……多分、泣かせるコトなくふるだろうし、そもそもふるようなコトもないかもしれない。

「やっぱり……神原君って、そうだったんですね……」

「……なにが？」

涙声の呟きに、得体の知れない悪寒が走る。

何かこの子は途轍もなく何かオカシイコトを言うのではないか……？

「神原君に告白しようって思って、みーちゃんや栗木さんに相談した時に……」

みーちゃんってのは、萩野さんのコトか。萩野美由紀。

そういえば、萩野さんと坂祝さんと栗木さんっていつも三人で固まってたなあ。

「あ、あのさ。それで、何か『やっぱり』なんだ？」

聞きたくない。聞きたくないが、それでも訊ねなければならぬ。

「神原君は……仲谷君とデキてる、って」

x x x

「冗談だよ、冗談。俺にそっちの趣味は無え。そんなじゃ俺シャワー行ってくる。」

「……………覗かないですよ？」

「キモい。さつさと行け」

「ちえー、冗談の解んないやつー」

バスルームへと消えていく若菜。

少し落ち着きを取り戻し、俺はベッドに仰向けになった。味気ない天井を呆つと見つめる。

……………まあ多少なりとも落ち込んではいらぬ。恋愛に興味が無いとは言え、女子を泣かせるのは正直忍びない。

それに別に坂祝さんのコトが嫌いなワケでもない。ただ、好きだとは思えないだけ。

もしかしたら俺は心の障害でもあるのだろうか。

そりゃ全部が全部そうだとは思わぬが、健全な男子高校生であるのなら恋だの愛だの、見え透いた性欲だの……………。

そういうのがあってもいいんじゃないだろうか。

……………俺だって男だ。女性の裸を見れば興奮ぐらいする。

それでも、だから誰かと付き合ったり、好きになったり……………そういうコトに結びつかない。

「まさか、自分でも気付いてないだけで、やっぱり男が好きな男なのか、俺は？」

自分で口に出してみるが、怖気しか走らない。それは無い。絶対に無い。

「やつぱ……………壊れてるのかなあ……………」

手を胸に当ててみる。規則正しい鼓動が伝わる。当然だ。

「何やってんだか……………」

馬鹿馬鹿しくなつて、目を閉じた。

#03: Cadenza (音の無い詩) (後書き)

どうも、秋折紀織です。

こちらは『飽くなき赤色』に比べて更新がどうしても遅くなりがちで何だか申し訳ないです。

その分、量はあるような気がしますけどね。

続きます。

#04: C - a d e n z a (音が無い君との詩) (前書き)

過去話と後日談。

#04:C - a d e n z a (音が無い君との詩)

ヒラリヒラリ、と一葉。

飽くなき赤色 - Red Fraction -

翌日。今日は自由行動の日。とりあえず朝はクラスで集まって注意を受けた後に、グループ毎にタクシーを貸し切り、行きたいトコロに行くって感じた。

「…………でもさあ、気まずいよなー」
「何でお前が気まずく感じるんだよ」

本日自由行動をするグループは、俺と若菜。そして、坂祝さんと萩野さんの四人。

さつきチラつと見た限りじゃ坂祝さんの調子が悪いとかそういうコトはなさそうだったが…………。

それよりも、萩野さんを恐れるべきかもしれない。

「はい、それじゃグループのメンバー確認したら自分のトコのタクシーに乗って移動してくださいー」

担任の号令の下、俺は渋々、若菜は嬉々としてタクシーの前へと歩いていく。

当然、そこには坂祝さんと萩野さん。

「あいつ、おはよう！ ……神原君」

意外なコトに坂祝さんに挨拶されてしまった。泣きそうになるか、押し黙るか、萩野さんが嫌味を言ってくるかの三択だと思ってたんだが…………。

「あ、ああ、おはよう。坂祝さん」

少し面食らったが、何とか挨拶を返す。

萩野さんの方を見ると、何やら真剣な顔。嫌われたワケではなさそうだが……。

ふと隣の若菜を見れば、いつものニヤニヤした顔だった。

坂祝さんは少し顔を赤くしている。

俺はどんな顔をしていればいいんだ？

x x x

タクシーに乗り込んだ俺達は、まずは定番ともいえる水族館に向かった。

水族館なんて子供だましかと思ってたが、意外と面白かったり。

「鮫デケー」

巨大水槽の前に若菜がはしゃいでいる。子供かお前は。

「あ、坂祝ー。ちょっと向こう見て来ようぜ」

「え、あ、その私？」

「そうそう。まあいいじゃん。ちょっと付き合ってくれよ」

「え、ちょ、仲谷君!？」

唐突に、若菜が坂祝さんの手を取って、先へと進んでしまった。

……下手な演技だ。

「で、萩野さんは俺に説教？」

「……………まあね」

普段よりも口数の少なかった萩野さんがここに来て、ようやく口を開いた。

「神原さあ、梢の何処が不満なの？」

「別に坂祝さんに不満何て無い。俺が甲斐性無しなだけだ」

「そんなの言い訳じゃない……。あんた女の子一人と付き合う余裕

「ぐらい無いワケ？」

「余裕って意味じゃ無いわけじゃないけど。俺なんかと付き合ってたってツマラナイよ」

昨日、坂祝さんに直接言った言葉をもう一度言う。

直後。腹を殴られた。

「ッ!？」

「神原……気障ったらしいヤツだとは思ってたけどそこまで酷かったなんてね……!」

周囲が少しだけざわつく。どうせ痴話喧嘩か何かだろ、と腐った野次馬が好奇の視線を向けてくるのは気に入らない。

「萩野さん、こっちに」

有無を言わず、萩野さんの手を掴み奥に進んだ。

少し進むとペンギンの水槽の前に着いた。幸いなコトに、ベンチが何列も並べてあったので、とりあえずそこの一番奥に座る。

ここに来るまで萩野さんはとりあえずは黙っていた。

「……ふう。で、俺の何が酷いつて？」

「……その性格よ。気障で周りから浮くぐらい冷静で。常に自分を嫌って。

そんなの中学生ぐらいまでに済ませときなさいよ。ただの格好付けじゃない……」

「生憎、俺は昔っからこういう性格なんだよ」

下手すりゃ物心ついた時からこういう性格かもしれない。

無邪気に笑顔ではしゃぐ自分がかつて居たコトなんてあったらどうか？

……楽しいと思うコトが無かったわけじゃない。ただ、俺は誰かを楽しませるコトなんて出来ないと思ってる。

目の前の水槽、ガラスを挟んだ向こうに居るペンギンでさえ、人を笑わせているのに。

「疲れないの？ そんな性格で。」

こういうコト言うのってどうかと思うけどさ。神原、他の男子から

結構嫌われてるでしょ。自覚ある？」

「……ある」

「あつたんだ……。まあだから何ってワケじゃないけど。

そんな性格だから、周りに合わなくてさ。いっつも仲谷しか居無いじゃない。神原の近くには。」

神原はそれでいいの？ それで毎日が楽しいの？」

話が摩り替わっている気がしないでもないが、敢えて言わないでおく。

俺がそれを言っても、今している話を摩り替えるコトになるだけだから。

「若菜が居るから……。それでいいと思ってる」

「茶化すつもりは無いけど、神原ってホントにそういう趣味じゃないの？」

「それはない」

「……だったらさ、もうちょっと周囲に目を向けなよ。」

男の子の友情がどの程度のモノかなんて女の私には解らないけど……

……。きつと、神原と仲谷は異常なぐらい仲が良過ぎるよ」

手に力が籠る。一瞬、萩野さんを殴ってしまったおつかと手が動きかけるが、それを理性で抑える。

そんなコトしても、何にもならない。

「……気障なのは、地の性格で今更どうしようも無い。他の奴らが俺のコトを嫌いならそれで構わない。」

俺に手を出すのも全然構わない。若菜に手え出したら報復はするけどな。

若菜は……中学に入った時に会ったんだ。

同じクラスで、席が近くて。たったそれだけの偶然で、何かの事件をキツカケにしたワケじゃなく。

ただそれだけで、仲良くなった。運命とかそういう類の出会いだったと今でも思う。決して、男色とかそういうふざけた話じゃなく、だ」

俺の話聞いて、萩野さんは少し呆れたような顔をしていた。

「神原つて、何か壊れてるよね」

「それも個性つて言えばそうなのかな。もし、だよ。もし仮に……仲谷が神原の前から消えたら、神原はどうするの？」

若菜が、俺の前から消えたら……？

「……その時は、完全に壊れるんじゃないかな。今でも壊れて辛うじて動いてる状態なら、さ」

正直、若菜が居無くなった時の想像がつかない。

「そっか……。ごめん、変な話しちゃった。楽しい修学旅行のハズなのにね」

「いや……それは別にいいけど」

「しつこいけどさあ、神原。梢と一遍付き合ってみない？」

梢は神原のコト、諦めてないよ。あれで芯の強い子だからさ。負けずに食い下がる子だよ。

……付き合わないにしても、せめて仲良くしてあげて。気にかけてあげて。

あんまり、泣かせないで」

萩野さんは至極、真剣な顔だった。

「解った。今日は一日自由行動だもんな。せめて俺達四人が楽しめるように努めさせてもらうさ」

一匹のペンギンが、水の中へと飛び込んだ。ガラス越しに泳ぎを見せつけ、それを見てヒトが喜ぶ。

見世物にされているペンギンを少し尊敬する。

見世物だろうが、何だろうが。自分以外を喜ばせるコトが出来るのなら、俺はペンギン以下だ。

……少しぐらいは、誰かを喜ばせてみたいと。そう思う。

x x x

自由行動、最後は海だった。

泳ぐワケではなく、夕暮れに光る海を近くで見たいと、ホテルに帰る途中に寄り道したのだった。

水際ではしゃぐ若菜と萩野さんを見ながら、俺と坂祝さんは砂の上を歩いていた。

「今日は楽しかったね」

「うん、俺も楽しかった」

坂祝さんの歩幅に合わせて、ゆっくりと砂の上を歩く。

「水族館で、一度別れたよね。私と仲谷君。神原君とみーちゃんです。その時に、私仲谷君に怒られちゃった」

「……怒られた？」

「うん。神原君をモノにしたいなら、裸になって迫れーとか……」

「本気にしない方が身のためだ……」

「ふふふ。流石に私もそんなコト出来ないけど……いずれは、ね」

「……萩野さんの言った通り、諦めてないのか」

「もちろん。神原君が私のコトを好きになってくれるまで、ずっと私は神原君のコトを好きでいるつもり」

「じゃあ、俺が坂祝さんのコト好きになったら、好きじゃなくなるワケか」

「そうだね。神原君が私のコトを好きになってくれたら、私は神原君のコトを大好きになるから」

「……そっか。あのさ、昨日言ったみたいに、俺は誰かを好きになるとかよく解らない。

だから、今坂祝さんと付き合っても、きっと坂祝さんを楽しませるコトは出来ないし、色々と気を揉ませるだけになると思う。

……でも。坂祝さんが嫌いなワケじゃない。だから、これからも仲良くしてくれないかな。

都合のいい話だとは思う。でも、もう少し友達で居させてくれない

か

自分を変えたい。変わってみたい。そう思いかけている。そのための階段を昇ってみたい。そう思っている。

「いいよ。わ、私の傍に居させて、メロメロにしてあげる……ってやっぱり恥ずかしい……！」

きゃわー、と顔を真っ赤にして両手で頬を押さえる坂祝さん。

ホント、俺には勿体無いぐらいの可愛い子だ。

俺なんかよりもっと上が狙えるだろうに……。いや。この考え方がダメなのか。

変わりたいなら、まずこの考え方を止めないと。

「おい、そのラブラブカップルー！ ちょっとこっち来いよー」
若菜の声が俺と坂祝さんと呼ぶ。

「何だ？」

「写真撮ろうぜ、写真」

若菜の手の中には使い捨てカメラ。そういえば今日ずっと持ってたな。

「んじゃ、まずは坂祝と萩野のペアな」

夕暮れの海を背景に、坂祝さんと萩野さんが並ぶ。

「んで、次はそこに秋介をプラス」

「えー、それだったら私は抜けるわ。ほらほら、神原早くッ」

「おわっ、押すな!？」

萩野さんに背中を押されながら、無理矢理坂祝さんの隣に立たされる俺。

「よーっし。おい秋介、もっとくっついて。あ、坂祝からくっ付いてもいいよ。」

あーもう、秋介、腕だ。肩に腕を回せ。ついでにそのおっぱいに触れる感じで！」

「お前少し黙ってる！」

「ほら、梢もー。もっと大胆に攻めなさいー」

「う、うん。解ったよ、みーちゃん!」

「え、ちょ、坂祝さん!？」

「今だッ、仲谷!」

「合点だぜッ、姐御!」

……非常に、いかがわしい写真となりました。

「なあ、この写真」

「そうね。いい脅しのネタになるわね」

陰険な笑みを浮かべる若菜と萩野さん。この悪人共めッ。

「つか、そもそも坂祝さんが俺に……。いや、もういい。思い出すは止めておこう。」

当の坂祝さんは、自分の行動に顔を真っ赤にして少し離れたトコロで蹲っている。

湯気でも出そうな勢いだ。冷却ファンでもつけた方がいいんじゃないだろうか。

「んじゃ、悪いけど萩野、シャッター頼むわ」

「はいはい」

「よし、秋介ッ、笑え!」

「……そんな無茶な。俺の分もお前が笑え」

「オーケー! んじゃ、百万ドルの笑顔だ!」

「ただの馬鹿面にしか見えねえよ」

「はいはい、馬鹿二人ー、撮るわよー」

俺まで馬鹿に含むなッ。

x x x

儂げな煙が細く細く立ち上っては消えてゆく。虚ろな夕暮れの中、合わせていた手を解いた。

「冴城には、我が俣を聞いてもらったな」

「大丈夫だよ。実際、二つ返事だったから」

「そうだな」

目の前には、二度目の訪れとなった、『仲谷家乃墓』。

赤い空に、線香の細い煙が散っていく。

「こんなトコロにつき合わせて悪かったな、姫香」

「気にしなくていいよ。……私も、来たかったから」

この仲谷の家の人たちが眠る墓に、さつき若菜の遺骨を納めた。

俺が一年も眠っている間に、姫香が冴城に頼んで若菜の遺体を焼かせてもらったのだ。

それから、三年が経った。

俺と姫香は、鞘朽の中で評価を受けていき、ようやくこんな我が俣が叶うぐらいには成れた。

「今まで私用で鞘朽から外に出たといって人は居なかったワケじゃないけど、実際叶ったのはほんの数人だって、話らしいよ？」

「ま、俺達は死人だからな。不用意に外に出て知り合いにでも会うものなら大問題だ。」

実際、俺達も一回断られたからな」

俺が目を覚まして、姫香に話を聞かされてすぐのコトだ。

折角だから、若菜の骨を仲谷の墓に納めたいと冴城に相談したら、現状で外に出るコトは出来ないとと言われてしまった。

外に出たかったら、地位を上げる。とも言われた。

「三年間ずっと頑張ってきたもんね」

「ま、そのお陰で周りから色々言われるようになったがな」

恥ずかしい異名やら何やらが囁かれるようになったのは、ここ最近だ。

しかも人によってそれが違うのだから、聞く度に違う異名になっ
ていてワケが解らない。

「『告死天使』とかー、『死神カップル』とかー」

「だから、恥ずかしいから止める」

不意に、姫香の雰囲気が変わる。さっきまでのふざけた顔ではな
く、真剣な。

「ねえ、シユウスケ君」

「何だ？」

「『仲谷若菜』のコト。もう整理出来た？」

「……整理、か。どうだろう。多分出来てると思う。」

若菜が死んだコトはもう受け入れてるし、あいつが居無いコトを嘆
くつもりもない。

顔が見たい、と思うことはたまにあるけどな。

あいつが解理者だとか、俺が解理者だとか、そんなコトとは関係な
くて。

俺と若菜が過ごした五年間は、本当に存在していた時間だったから
……」

そこに衝動がどうか、解理者がどうかというのは一切関係ない。
あいつと俺と一緒に過ごした時間は、確固たるモノとして存在し
ていたのだから。

今は亡き親友の顔すら見れないのは、少しだけ。悲しい。

「あのね。シユウスケ君に渡すモノがあるの。」

鞘朽が瞑主を制圧した時、冴城先生もそこに行つて、丁度仲谷さ
んの私室に入ったんだって。

その時、冴城先生が持ってきてくれたの。

シユウスケ君に渡すかどうかは、私が決めて。って言うて」

そう言いながら、四角い包みを取り出す姫香。

「これ……」

「開けてみて」

白い紙で幾重にも包まれたソレを、恐る恐る解いていく。

やがて、顔を覗かせたのは、一葉の写真だった。
ガラスの写真立てに入ってたままの。

「私室に、伏せた状態で置いてあったんだって……」
若菜が死ぬちょうど少し前に行った高校の修学旅行。その時、夕暮れの海で撮った写真。

そこに写っているのは、少し仏頂面で今と全く変わらない顔の俺と最後に生身で出会った時より若く満面の笑みの若菜。

確か……笑わない俺の代わりに、若菜が笑うとか言ってたっけ。

「……………」

裏には、場所と日時、それと俺の名前が書かれていた。

……若菜が瞑主に拾われて、その後に仲谷の家から回収したのだろうか。

今頃、こんな写真を見るコトになるなんて思いもしなかった。

「……ありがと、姫香。これ貰ってつていいか？」

「もちろん。それはシユウスケ君のモノだよ」

もう一度、若菜の墓に目をやる。

こんな風に弔ったトコロで、何がどうなるワケでもない。……だ

けど、意味があるのだと、信じたい。

若菜。この写真は、溜まりに溜まった奢りのツケとして貰ってく。

……瞑主で出世してみたいだから、これもある意味出世払いになるのかな。

「若菜……さよなら。次はいつ来れるか解らないけど……もう来れないかもしれないけど。」

俺は、若菜に会えて、友達になれて……良かった」

短くなった線香。風に揺れる花。

じきに日も落ちる。

「……姫香、冴城のあの話。俺受けるコトにする」

「昇格の話？ 部長長の指揮官だよな」

「ああ。今のままでも生きていく分には問題ないけど……。またココに来るためには、もっと頑張らないといけなさそうだからな。」

その内、冴城たちと肩を並べれるぐらいになってやるさ」「じゃあ、私は何処までもシユウスケ君に付いていくよ」「頼りにしてるからな、姫香」「任せてよ!」

夕闇の墓地を後にする。

俺達の居場所は、鞘朽だ。だから、鞘朽に帰る。

……少し昔を思い出した。まだ若菜が死ぬ前の話。俺が死ぬ前の話。

手の写真を見つめる。

……良かった。若菜は笑っていた。

自然、笑みが零れた。こんな時が確かに存在していたのだと、そう思ってた。

ありがとう、若菜。

さようなら、若菜。

今度は、俺がお前の分も笑ってやるよ。

#04:C - a d e n z a (音が無い君との詩) (後書き)

どうも、秋折紀織です。

最後に目が覚めてからの三年後です。

秋介の実年齢が25。姫香が21。冴城が33ですか……。
25歳とかもうオッサンですよ。見た目は17歳ですが。
姫香は相変わらずロリな体形ですが、
それでも大人の雰囲気は出てきているというのに……。

さて、過去の話と後日談の両方を混ぜました。

- Red Fraction - は名の通り赤い断片でして、蛇足な
内容ばかりとなっています。

某アニソンは関係ないですよ？

解理前の若菜を始めて書いたのですが、なんというか姫香の男パー
ジョンって感じが否めません。

本当はもつとDSで秋介を弄り倒すキャラなのに……。

女子二人は……まあ、その後普通に暮らしてます。

つか、坂祝さんは俺が嫁にしたいくらいだわ(俺自重

感想、批評、俺の嫁宣言などなど、ありましたらぜひどうぞ。
では。

#05:Sorrow(馬鹿の千人殺し)(前書き)

ちよつと書いてる途中でグダグダになってきて、出来が悪いかもです。申し訳ない。

時間軸は本編中で、別視点です。

#05:Sorrow(馬鹿の千人殺し)

目に焼き付けて、死ぬがいい。

飽くなき赤色 - Red Fraction -

「まったく、ボサツとしてんなよ。早えトコロ終いにしようぜ。なあ？」

彼の苛立ち混じりの口調に私は身を震わせながら早足で彼の傍へと駆けつける。

「今に始まったコトじゃねえけど」

「すみません」

息つく間もなくカバンから機材を取り出し、設置の準備をする。

「……こっちが、こうで。これはこっちで……」

「……………」

完成。

「二分。前より早えけど、こんな程度三十秒で終わらせる」

「すみません」

私はしよぼくれながら、一步後ろに下がる。

ちなみに前回は五分かった。

「ん……。よし。二十時、目標を自室に確認。特に異変無し。っと望遠鏡を覗きながら報告する彼の言葉を、私は手帳に書き連ねる。

「次。準備は出来てるか？」

「あ、はいッ。今すぐに！」

「……先に済ませとけ。もういい、俺がやるからお前はコッチ見て

る」

別の機材の準備をするのを忘れてしまっていた……。

準備をしようとするも、彼は私を押しつけキパキと機材の準備をしてしまう。

「ちゃんと、見てんのか!？」

「は、はいッ!」

望遠鏡のレンズの先には、推定衝動解理者。

『近い内にもしかしたら衝動に解理するかもしれない人物』。

鞘朽がどうやってその人物を見つけるのかは解らないが、下っ端の人間である以上、私達はそれに従うしかない。

「……起動完了、と。……コツチも問題無しか。藤澤^{フジサワ}、パソコンのハックは?」

「はいっ、出来てます。F4に合わせて頂ければ映るか?」

「それが見えねえから聞いてんだけど」

「えッ? そ、そんなハズは……」

慌ててキーボードを叩く。設定を見ると、どうも上手くいったない……みたい。

「ご、ごめんなさいッ」

「お前な、今の時代パソコンは貴重な情報源だぜ。新聞やテレビなんかよりよっぽど情報が集まる。

ましてや、解理のキツカケになりそうなモノを無意識下で探してたりでもしたらそんだけ解理の確率が上がるだろッ!

だっていうのに、俺達は監視する立場でありながら、その重要なポイントを監視するコトが出来ない!

それがどれだけ、ヤバいのか! お前は! 解ってるのか!!!」

「す、すみません!!」

「もういい。お前はソツチだけ見てろ。俺は何とか今からハック出来ないかやってみるからよ」

「……すみません」

×××

藤澤芽衣^{フジサワメイ}。正直言って、厄介なパートナーだ。

一年か二年ぐらい前に鞆朽に拾われてきたらしいが、普段の訓練の評価はあまり良くない。

唯一の長所が、電子機器の扱いが上手いというぐらい。上手いコトは上手いが、それでもミスは多い。

それに電子機器の扱いなど、戦闘訓練に比べれば遥かに簡単に習得できるコトで決してこいつの長所がオンリーワンなわけではない。ぶつちやけて言えば、落第生だ。

だが、十八という年齢と、女というコトを考えると前線以外に回すのはあまり効率的ではないと鞆朽の上層が判断した。

その結果、何の因果か俺のパートナーとなってしまった……。

昨晚の監視の時だって、望遠鏡設置の準備は遅いし、隠しカメラの出力端末の準備は忘れるし……。

勘弁して欲しい。

別にこの仕事に誇りを持っていたり、鞆朽での地位を上げたいワケではない。

それでも鞆朽に拾われた以上、与えられた仕事はこなすつてのが筋だ。

まあこんなのを押し付けられたのは、俺が仕事できるからつてもあるんだろうけどさあ。

厄介払いの生贄にされたみたいで、色々とお上に不満を言いたい。それでも、前線に立つたかが俺一人の言葉が、ウチの総責任者である宮眺^{クナガヒ}江支部長に届くとは思えないが。

「……苦い。辛い。しょっぱい。……不味い」

「す、すみません！」

朝飯を藤澤に任せたのは間違いだったな。

明日からは自分で作るか……。

「藤澤。今日の行動を言ってみろ」

「はいッ。今日は休日なので目標を一日中監視します」

「……七十点。お前は、休みの日に一日中家にいるのか？」

「あ……。すみませんッ。えーっと……」

慌てふためきながら手帳をめくる藤澤。

「あ、はいッ。えっと、目標の今日の予定は……ボーイフレンドと

遊園地、ですね。なので、私達は遊園地で視認による監視です」

「そうだ。解ったらさっさと支度しろ。目標が待ち合せているの

は九時だ」

「解りましたッ」

返事だけ元気のいい藤澤は、割り振った自分の部屋へと消えていった。

女の支度は手間がかかるといっが、藤澤の場合その何倍かかるのだろうか。

……据え置きしている隠しカメラの出力端末の画面に目をやると目標は未だ眠っていた。

なんとか、間に合うか。

x x x

今日の予定は言うならば尾行のようなモノだから……あまり自立たず人込みに紛れやすい服にしないと……。

それにしても……、私は何てドジなんだろう……。

重ねてきたドジは数え切れず、こんなじゃあ浅柄君アサガラが怒るのも無理ないよね……。

でも、遊園地か……。いいなあ。前に行ったのは何時だった
け。

鞆朽に拾われた以上、もう遊ぶコトなんて出来ないと思ってたけ
ど……。

いや、違う！今日は任務で行くんだから、浮かれてちゃいけな
い！

こんなんじゃ、また浅柄君に怒られちゃう！しっかり！気を
引き締めて！

「お待たせしました」

「ん。藤澤にしては早かつ……。お前は、そんな格好で行くつもりか
？」

「へ？」

視線を下に落とす。

「ああああ！？」

考え事に気を取られていて、スカート履くの忘れていた……。！
ホント、私ってドジだなあ……。

x x x

「……やっぱり、皆楽しそうですね」

「遊ぶところ何だから当たり前だよ」

遊園地に入ってから数時間。昼も過ぎ、日もそろそろ暮れようか
という時間。

目標は現在、観覧車に乗っている。その間俺と藤澤は近くのベン
チで待つ。

歩きながら楽しそうに笑いあう家族、カップル、友達……。

そういう人々を見て、藤澤が静かなため息を吐いていた。

「任務が無ければ遊べたのになあ、って顔してるな」

「へ、あ、いえ。そんな……コトは」

「でも任務が無ければこんなトコロには来れない。俺達は一度死んでるんだ。そこを鞘朽に拾われた。」

確かに、無理矢理生かされたって思わないでもない。所詮は自分たちに都合の良い手駒を作るためなんだからな。

だからといって、今生きているのは間違いなく鞘朽のお陰だ。

……こんな風に、任務のついでに、もう二度と戻れない『普通の世界』を見せ付けられるコトもある。

それでも耐えなきゃいけない。鞘朽が俺達の居場所……帰る場所である限り」

「……浅柄君。何か格好いいですね」

「褒めても何もでないぞ」

「……素直な感想を言っただけです。私だって、鞘朽が無かったら死んでたんです。」

だから、鞘朽に恩義を感じているし、鞘朽だけが自分の居場所……というのも解ってます。

浅柄君に比べたら、私は未だ鞘朽に来て日が浅いです。まだ浅柄君の言う『普通の世界』に未練があるのかもしれない。

……でも、もし鞘朽を無視して今更『普通の世界』に戻ったとしても……。

私の居場所はありません。友達や、家族。そういった人達はもう私を見てはくれません。死人ですから。

鞘朽には遊園地みたいな解りやすい娯楽は無いけど、鞘朽は決してツマラナイ場所じゃないんです。

少なくとも同じ境遇の人達が居て、苦しみや哀しみ、痛みを理解しあうコトが出来ます。

そういう人達と楽しく笑いあうだけで、私は楽しいです」

「そうだな。そう思うのなら、もう少し手際良くしてくれ」

「そ、それは。はい……。すみません」

そろそろ、目標が降りてくる頃か……？

「？ 藤澤、何かおかしくないか？」

「え？ どうかしたんですか……？」

観覧車の乗降口が何か騒がしい。嫌な予感がして、近くまで駆け寄る。

が、人だかりが邪魔で先が見えない。

「ちっ、邪魔くせえな！」

勢いをつけて、タツクル気味に人だかりに突っ込む。

何とか抜けたその先に。

血まみれの空席があった。

「な……」

観覧車はその動きを停止していた。降り口のトコロで止まっているその席には誰も座っておらず、ただ血が散っているだけだった。

ドアの上に書かれている数字を見れば、目標が数分前に乗り込んだモノと同じ……。

「何があった!？」

乗降口でオロオロしている従業員を捕まえて話を聞きだす。

それによると、この席が下に降りてきた時には既に誰も居無くて血まみれだったという。

……落ち着いてもう一度、その血まみれの席を見る。

血が散っているのは向かい合う座席の片側だけで、ついでに窓も割れていた。

まさか……。

「くそッ」

今頃になつてようやく人込みを抜けて藤澤がやってきた。

「ハア……浅柄君……一体どういう……？」

「とりあえず着いて来いッ」

観覧車の裏は遊園地の敷地外で、林が続いている。

俺は敷地を隔てる柵を乗り越える。

「藤澤ッ、早く来い。すつとばけてる場合じゃねえぞ！」

「は、はいッ！」

同じように藤澤も柵を乗り越え、走る。

「そ、それで一体どうなってるんですか？」

林の中を走りながら、藤澤が訊ねてくる。

「目標が多分、観覧車の中で解理した。席が下に降りきる前に同乗者を殺して窓からこっちの林に飛び降りたんだ！」

きつと同乗者の死体もこの辺に落ちてるハズだ。それは後で処理班に任せるとして、俺達は目標を追う！」

「わ、解りましたッ」

目標は同乗者を殺してるから多分、『殺人』かそれに類する衝動に解理したと思う。

人の多い遊園地じゃなく林に入ってたってコトは……コッチの方が人をより多く殺せると判断したから……。

この林を抜けた先には、ここらで最大の工場地帯がある。

工場地帯なら、小さな火種でも簡単に大きな被害になる恐れがある。

この時間だと……丁度仕事が終わる少し前、か。工場地帯の規模からいって遊園地よりもよっぽど人が多くかつ殺しやすいだろう。

「見えた！」

ようやく林を抜ける。が、目標の姿は捕捉出来ない。

「くそッ。何処にいやがるんだ！？ 藤澤、発信機は！？」

「い、今見えます……。えっと……」

「早くしろッ！」

「す、すみません！……こっちです！」

藤澤の指差した方に再び走り出す。走りながら、武器を確認する。あまり仰々しいモノは持って来れなかったので、拳銃が二挺だけ。人目が未だあるので、スグに取り出せる準備だけしておく。

「ハッ、ハッ……！ 道が入り組み過ぎて、全然みつからねえ……ッ！」

無造作に乱立した工場と事務所が、まるで網の目のような無数の細道を作っている。

こんなんじや逃げるのも隠れるのも簡単だ。

発信機があっても、簡単に見つけられない……。

「何だ！？」

突如、爆発音がした。あさつての方向で、煙と炎があがっている。「くそつ、逆側に居たか！ 藤澤ッ、お前もさっさと戦闘準備しておけよ！」

お前も鞘朽に居場所があるって言うなら、本気出してみる！」

「は……はいッ！」

空に見える煙を指し、疾走する。

走る間に二度目、三度目の爆発が起きる。早く追いつかなければ被害は広まるばかりだ。

「浅柄君……見て！」

「な……ッ」

一度目の爆発。二度目の爆発。三度目の爆発。

それは目標の進路に間違いなく、その方向を順に辿り更にその先を予想して……。

「アレは……やばい」

目に入るのは天然ガスの大きな丸いタンク。最近になって地下からガスが見つかって、工場地帯の一角に建ったって……。

「あんなのに火つけられたら、目標自身だって死ぬだろ……？」

だから、火をつけるコトはしない。……なんてコトはないだろう。解理した衝動が不明なままだ。多くの人間と死ねるなら本望なんという感じの衝動だったらどうする？

「急ぐぞ、藤澤！」

「は、はい！」

何としても、目標より早くあの場所に着かなくては。

×××

……私はまたとんでもないミスをしてしまった。

まさか、発信機の表示を逆に見てたなんて死んでも言えない。

私が示した方向と真逆で爆発が起こったコトを浅柄君はどう納得したのかは解らない。

途中で発信機が目標の体から落ちたとでも思ったのだろうか。とにかく、今は走って追いつかなきゃ！

ようやく目標を視認できたのは、ガスタンクの目の前だった。

「おい！ その女！！」

浅柄君が怒鳴り声をあげる。

「ふらり、と一度こちらに目を向けただけで、目標は再びガスタンクに近づこうとする。」

「ちっ、まだ少し遠いか。藤沢、挟み撃ちにする。お前は向こうから回れ。」

目標の足を止めるコトだけに専念しろ。数分前に解理したばかりだ、まだ太刀打ちできる範囲内だ」

「解りましたッ！」

銃を構えながら、浅柄君は走っていく。私も自分の銃を持って逆方向から目標へと近づく。

……何とか足止めして、トドメは浅柄君にッ。

目標は階段を昇って球状のガスタンクの一番円周が大きいところに作られている通路に居る。

私は別の位置に設置されている階段を昇り、円周をグルッと回っ

て目標へと近づく。

浅柄君もその逆から、同じように。まずは足止めのために先に私が仕掛ける。

目標は火をつける場所を探しているみたいだ。それに武器は持っていない。

なら、何とかなるはず。

「と、止まりなさいッ！」

一歩踏み込んで、目標の前に躍り出る。

「邪魔しないで」

目標の足が動く……。あれ、思ったより速

「あ……？」

目の前に目標の頭が見える。反応出来ない速さで懐に潜り込まれたんだ……。

その認識と共に、足の力が無くなり、激痛が走った。

鉄の足場の上に自分の体が転がる。痛みに喉が喘ぐが、悲鳴一つ出ない。

視界は真横になり、手からは力が抜け、銃は隙間から下に落ちてしまった。崩折れた体はもう立つコトを忘れてしまったみたい。

「藤澤！？ くそッ、だからすつとぼけてんじゃねえぞ！」

浅柄君が目標の背後から飛び出してきた。

「このッ！」

浅柄君の銃が目標に向けられる。

その時、急に私の動かない視界が揺れた。持ち上げられた

と気付いたのは浅柄君の顔がまっすぐに見えたから。

「邪魔しないで」

目標の声私の背中から聞こえる。ああ……そういうコトなのか。

「ッ……藤澤……！」

「あ」

声が出ない。体に力が入らない。何も出来ない。

脳だけがまだ活動を続けていて、体はもう死んでるみたい。

そんな死んだ体だからこそ、目標にとっては絶好の盾になってしまうのか……。

浅柄君は銃を持つ手を震わせている。私なんかを撃てなくて迷っている……？

「ッ」

構わず撃つて、という言葉さえ言うコトが出来ない。ただ小さな喘ぎを零すだけ。

ダメだ……。こんな時、こんなところで、こんな状況で、私はドジばかり……。

「藤澤あ……ッ」

苦しい声で私の名を呼ぶ浅柄君。私なんかに構わないで撃つちゃえばいいのに……。

でも、知ってる。いつも私のドジを叱るのはアナタが優しいからだから、こんなドジな私を切り捨てるコトが出来なくて苦しむハメになる。

「」

動きなさい、私の体。どうせもう死ぬしかないんだ。この傷じゃ助かりっこない。

だったら……。まだ死にきれないのなら……最後ぐらい、命を賭して彼のタメになるコトをしなさい……！

「！」

動かない体が、微量揺れる。目標に掴まれている肩を振り払い、私は……。

この細い鉄の足場から墜ちた。

遠ざかっていく浅柄君にさよならを心の中で言う。邪魔になるだけなら、私はあの場に居なければいい……。

そろそろ地面かなあ。頭から落ちてるから多分死ぬだろう。それでいい。生きていても私は邪魔にしかならない。

思えば鞘朽に来る前だって私は周りに迷惑ばかりかけていた……。そう。私が死に掛けた原因だって……。

x x x

「ですから、それは私とは違う支部でして。……そりゃ確かに同じ『鞘朽』ではありませんけど。」

解りました。ええ申し訳ありません。あちらの支部長にも伝えておきます。

ええ、此度の落ち度は私どもにあります。事後処理は……。ええ、はい。では」

電話を切る。毎度毎度、小言しか言わない連中だ。

こんなのが国を動かしているのだと思うとイライラする。でも、こんなのでなければ国を動かせないのも事実……。か。

切ったばかりの電話がまた鳴った。

「今度は誰よ……。はい、冴城です。……ああ、宮眺江君」

『今頃お偉いさんから煩く言われてると思ってるね。侘びをと思ってる。そうね。丁度今さつき言われてたトコロよ。今回のアナタのトコロの前線要員が起こした失態で、どれだけの損害がーってるね。結局、どうという状況であんなコトになったの？』

『本当に申し訳ない。正直言って、ウチの支部は人員の錬度が低くてね。まあ、そんなの言い訳にもならないか。』

……簡単に言うと、推定衝動解理者を監視していたウチの前線要員が、突然解理した目標を追跡、工場地帯に紛れた目標はいくつか小

さな爆発をした後、ガス施設に侵入し、そこで要員の一人を殺して、もう一人はほぼ相打ちで目標は最後の力でガスに引火。で、後はドミノ倒しの如く誘爆して辺り一帯火の海ってワケだ」

「今度ウチで腕のいい戦技教官を二人ぐらい貸しましょうか？ 支部の戦力管理も宮眺江君の仕事の一つでしょ。」

私はアナタに煩く言うつもりは無いけど、久世君や遠宮君あたりが煩いでしょうよ」

『……ああ。克樹カツキにはさつき怒られてきた。和叉カズサには君の後に電話しようと思ってる』

「もしかしたら直接乗り込んできたりしてね」

『止めてくれ……そんな恐ろしい状況想像したくも……』。

なッ!? ちょ、和叉!? お前、向こうの支部はってコラおい! うわッ!?

ツー、ツー、ツーと虚しい音を鳴らす受話器を切る。きつと今頃修羅場だろう。可哀想に。

x x x

「本日未明、大朽羽工場地帯で火災が発生しました。

被害は甚大で、死傷者は予想では数千人に及ぶかもしれないのコトです。

火の手は未だ消えておらず、工場地帯全域が燃えています。

近隣は通行止めになり、多数の消防車を動員しての必死の消火活動となっています。

専門家の話によると、今回の大火災の原因の一つに近年発見された地下の天然ガスにも火が点いたコトにより被害が拡大したのではないかと、とのコトです」

ニュースから流れる言葉、映る真つ赤な映像。それらが私の脳内に入り込んで……カチリ、と頭の中でスイッチを鳴らした。

私は……こんなコトが自分の手で起こせたらいいな、と思っている。この手で、何百、何千という人の命を奪えたらいいな……と。

殺したい。一杯一杯。この手で人を殺したい。

そうだなア……手始めに、学校の皆を殺そうかなア。

何を使おうか……爆弾なんてどうだろう。いいねエ。それは凄くいいよ。

そうと決まれば早く爆弾を集めなきゃ。少し向こうに花火を作ってるトコロがあったっけ。そこに行けば集まるかなア。

後は……あアそうか。自分で作っちゃえばいいのか。理科室とかア、工場とかア。

そういうトコロから色々くすねてこればいいよね。

どうせなら……楽しくいこう。一番に逃げ出した人のせいで皆が死ぬなんてコトになったら面白いなア。

ウフフフふふふふふふふつふふふふふふ。

そっか。私は、『殺戮』がしたいんだ。

#05:Sorrow(馬鹿の千人殺し)(後書き)

どうも、秋折紀織です。

発端は、『ドジっ子って実際に居たらかなりウザいよね』でした。サブタイトルの『馬鹿の千人殺し』はホントそのまま。

ドジっ子がドジしちゃってそのせいで人が死にました的な。

よくドジっ子メイドが熱いお茶を零しちゃったりするけど、あれって冷静に考えて顔に火傷だよね。

傷残ったら、ドジとかそういう問題じゃないよね。

可愛ければ許すとか正直、無いよね。

ラストの締めは月山花樹。

まあ彼女が解理した原因が、この大火災っていう話なのでね。

丁度、秋介たちによる監視が終わった後にニュースが流れて解理してしまっただのですよ。

なんとというご都合主義。でも今更気にしない。

今回非常にグダグダでした。書いてる途中で色々あったせいで……。すみません。

それでも楽しんでいただければ幸いです。

感想、批評、お前これはねーわ、などなどありましたら何でもどうぞ。

では。

#06: A - l c o h o l (酒宴談遊) (前書き)

時間軸は本編ラストより1、2年後。
鞘朽創設者たちの集まり。

#06: Alicohol (酒宴談遊)

宴。

飽くなき赤色 - Red Fraction -

「そついや、冴城女史のトコロの……なんて名前だっけか。……何か二人ぐらいが大活躍してるらしいじゃねえか」

「ああ、僕のトコロでも噂になってるみたいだね。任務達成率120%とかなんとか」

「あらら、そつちもかいな？　ウチのトコでも騒がれてるみたいだよ？」

場所は何の変哲もない、街中のある居酒屋。

個室を一つ貸しきつただけの会場。そこで八人の男女が酒を飲み交わしていた。

この何の変哲も無い男女八人。この人間たちこそが、鞘朽を創設、運営している八人。

「ちなみに、私はそのウチの一人に会ったコトあるのよねー」

日本人の顔立ちにショートボブの金髪を揺らす、ホシムラ アユミ星村歩。

「え、ホンマに？　で、さあ。……どうなん？」

その星村歩の隣に座るのは、長めの黒髪を一本に纏めて垂らしている関西弁らしき口調で話す女性。

彼女は、エリナキ シズル襟鳴静流。

「んふふ。静流が大好きな『和服が似合って最初は強がるけど次第に求めてくる』系の可愛い子だったのよねー」

「ホンマに！？ キョーコ！ 私にその子譲って！！」

「イヤ」

「そんなア！？」

「それで、その二人つてのはどんなヤツなんだ、冴城女史よお」

「厳つい風貌に、厳つい口調の男。顔中傷だらけで、本人の言によれば全身に傷があるとのコト。」

彼は、遠宮和又トオミヤカスサ。創設者八人の中でもとりわけ武闘派で通っている。

「やっぱ和又は、腕利きつて聞くと気になるみたいだね」

遠宮和又の言葉に茶々を入れるのは、彼とは真逆な雰囲気クナガの宮眺江一也。

「ふん。最近は温いばかりだったからな。期待しちまうのもしょうがねえつてモンだろ」

「だからつて、僕んトコの前線要員をボコるのは止めてくれよ……。しばらく皆動けなくなつたんだぞ」

「お前のトコロの訓練が甘いからだ。それに結果的に皆、強くなつたんだらう？」

「まあね。お前は厳しい割りにちゃんと成果を出すから凄いよ……。その点には感謝してるさ」

「宮眺江。コレに懲りたら、この前の大火災のような失敗を無くせよ？」

「うへえ。それについては、充分反省しておりますとも。克樹様」

宮眺江一也の隣に座るのは、久世克樹。メツシュの入つた前髪が目立つだけで他には一切飾り気の無い男。

「茶化すな。俺なんかはまだいいが、今回一番巻き込まれたのは恭子だ。損害自体にどうこう言うつもりは無いが、手間を増やした分は謝っておけよ」

「大丈夫よ、久世君。宮眺江君にはよおしく謝ってもらつたから。」

それに、失態を犯したのは私だつて同じだし……。ね」

バツが悪そうにグラスを煽る冴城恭子。

「んで。結局、話題の二人はどんなヤツなんだよ。冴城女史？」

「ん……一人は、神原秋介。三年ぐらい前ウチが拾った時には既に解理していたっていう稀有な子よ。歳は、今年で二十三か四ぐらいだったかしらね」

「え？ 神原秋介って私が前に会ったあの子よね？ そんな歳には見えなかったけど？」

星村歩が記憶の中の印象と冴城恭子の言う年齢との食い違いに疑問を挟む。

「ああ、彼成長が止まってるのよ。十七の時に『殺人』解理者に出会っててね。その時に、親友やら家族やらを殺されたショックがキツケだって本人は言ってたわ。

私も軽く検査したけど、原因不明。まあ多分、衝動解理の副作用だとは思うけど……」

「だが、そんな事例は知らねえな。腕が立つならその体も特別ってか」

羨ましい話だ、と遠宮和叉がぼやく。

「ま、直接では無いにせよ、強さの一端ではあるわよね。若いってのはそれだけで長所だから。

遠宮君も、そろそろキツいんじゃないか？」

「馬鹿言え。俺は生涯現役だぜ」

その言葉にハハハ……と乾いた笑いを漏らす宮眺江一也。何か嫌な思い出でもあるのだろうか。

「も一人はどんななの？ もう一人も可愛い男の子だったりする？」

「……………うふ。残念ね静流。もう一人は、涼代姫香。女の子よ。こっちの子は、八歳の時からウチに居ただけ、イマイチ伸びなくてねえ。

神原秋介と組ませて、初任務を与えたのだけど、その辺りから急激に強くなってきたのよ。

だから、神原秋介と涼代姫香。この二人が揃って初めて、強いと言

えるわ。まあこの二人には目的があるみたいだからねえ」

「目的、か……」

意外にも、目的に興味を持ったのは、久世克樹だった。

「恭子は知っているのか？ その目的を……」

「久世君が喰いついたのはちよつと意外ね。ま、大したコトじゃないわよ。成果を上げて外出許可が取れるようになりたいんだって」

「外出許可……？ 意外だな。他に魅力的な特権が幾つかあるだろうに」

「普通ならね。……この二人は鞆朽こうちに来てから『外』に用事が一つ出来ちゃったのよ。」

まあ、細かい説明は省くけど」

「……何にせよ、鞆朽にとって得になる人員なら重宝してやるんだな」

久世克樹はそう締めた。

x x x

「ってかさあ、遅くない？」

酒の席が一时间ほど進み、襟鳴静流が二つの空席を見やる。

「まあそう言うなって。二人とも僕達なんかより仕事が多いんだからさ」

「そらそうやけどー。って、噂をすれば影。来たみたいやね」

足音が近づいてきて、個室を仕切っている襖が開けられる。

そこから現れたのは、真っ赤な袴に赤いレンズのメガネ。そして赤く染めた髪。赤色尽くめの男だった。

「遅くなつてスマンね。ちよいと仕事が片付かなくてさ」

「気にするな。お前の仕事の遅さは皆、承知してる」

「ちよ、それは酷いな。遅いんじゃない。多いんだよ」

「まあまあ。手間のかかる仕事ってコトが言いたいんでしょ、遠宮君は。」

遠宮君が口下手なものも皆、承知してるコトなんだし。気にしない気にしない」

赤色の男は、薄い笑みを浮かべながら席に座る。

ここに居る人間に立場の差は無い。皆が皆、同じ目的のために集まった同志。

故に、上座も下座も無い。だから座る場所はいつだってバラバラの適当だ。

「さつき連絡受けてね。高遠クンタカトオもすぐに来るってさ」

「さよかー。ほんなら、も一回乾杯しよか。ほんで高遠が来たらも一回乾杯な」

酒の満ちるグラスを掲げる一同。

言ってしまうえば、鞘朽の創設者たちは、『仲良しグループ』の集まりみたいなモノだ。

組織として鞘朽を運営し、構成員たちを纏めるために総責任者あるいは支部長という立場を持つてはいるが、それはこの八人の集まりの中では殆ど関係の無いモノ。

誰かがミスすれば全力でフォローするし、それを責めるコトもない。

宥めるコトはあっても、怒るコトはない。互いが互いを支えているのだ。

言うならば、『兄弟』が一番近いのかもしれない。

他人の集まりではあるものの、衝動というモノに触れ、そこから思い至りカタチにした鞘朽の元に彼らは一致団結している。

「遅くなった」

数分して、再び襖が開く。

「お、高遠クンようやっと来たかー」

「……ものの数分で出来上がってるみたいだな、式次イチジは」

「いやだなあ。いくら俺が真っ赤っかだからって、顔まで赤くなっ

てないってー」

「……赤いだろ」

「よっしゃ。高遠も来たコトやし、もー一回乾杯しよかー」

「静流は相変わらず酒が強いのね……」

「何言ってるの恭子？ 恭子だつて充分お酒強いじゃない。ただ、

ハメを外すと

「ダメ！ 歩、それ以上言わないでッ」

そうこうしながらも、夜は更けていく。

この光景だけを見れば、彼らが既に社会的死人だと誰が思うだろう？

偽善のような理念の下に集う彼ら。しかし確かに命を幾多も救う偽善。

所詮、この世は、偽善によって成り立っているのだ。

×××

「ほな、さいならー。また会おうなー」

鞘朽第三支部、支部長。襟鳴静流エリナキ シズルが車に乗って帰っていく。死人

ばかりの領域エリアへと。

「冴城女史。近い内に例の二人のトコロに行くから、そのつもりでな」

鞘朽第五支部、支部長。遠宮和又トオミヤ カズサが車に乗って帰っていく。死人

ばかりの領域エリアへと。

「んじゃ私も帰るわね。まったねー」

鞘朽第七支部、支部長。星村歩ホシムラ アユミが車に乗って帰っていく。死人ば

かりの領域エリアへと。

「俺も失礼する。次の機会にな」

鞘朽第六支部、支部長。久世克樹クセ カツキが車に乗って帰っていく。死人

ばかりの領域へと。

「はあー、少し飲みすぎたかな……。んじゃ、また会いましょうよ」
鞘朽第二支部、支部長。御東式次が車に乗って帰っていく。死人
ばかりの領域へと。

「じゃあまた今度。皆も元気でね」

鞘朽第四支部、支部長。宮眺江一也が車に乗って帰っていく。死
人ばかりの領域へと。

未だ店先に佇むのは、サエギ キョウコ タカトオ ケイイチ 冴城恭子と高遠圭一。

「既に終わった話題だったみたいだからな。酒の席では言わなかったが、冴城。」

お前のトコロで、二人ほど頑張ってるのがいるらしいじゃないか」
「神原秋介と涼代姫香のコト？ ええ、そうね。今のところは、外出許可を取るために頑張ってるみたいよ」

「……なら、それが叶った後はどうなると思う？」

「また頑張ると思うわ。あの二人はね、お墓参りに行きたいって言ってるの。だから、毎年行かなきゃならないでしょ？」

「だから、叶った後ももっと頑張らないとね」

「そうか……。今の調子で行くと、いずれは俺達と同じ場所にまで来るかもな」

「……へえ。高遠君。そのつもりなの？」

「まだ解らないさ。その二人が何処まで上り詰めるのか、どんな人間なのか。そういうアレコレを見定めた上で決めるコトだ」

「私は、悪くないと思うわよ。まあまだまだ子供だけどね。」

でも……鞘朽がこのまま存続して、いずれ私達も歳を取って死んでしまった時。

後を継ぐための人間が必要なのも確か、か。

瞑主の例もあるしね。攻め入られて誰か殺されでもしたら……」

「確かにな。数年前の瞑主の襲撃の時も、支部が二つ落とされた。」

幸いにして人的被害は最小で済んだし、星村も宮眺江も捕まる前に

逃げ出せた。

だが、もう一度同じコトがあつて助かる保障はどこにも無い。瞑主との衝突で、鞘朽の名だけが一方的にバシっている状況だしな。俺達の知らない組織が鞘朽を狙つていても不思議じゃない。

……そういう時のためにも、腕の立つ人員は確保しておかないとな」

「……そうね」

「さて。それじゃあ帰るとするか。これからも頼むぞ、冴城」

「そっちもね。」

君も、ああ見えてきつと無理してる。

歩はあと数年もしたら声が出なくなる。御東

高遠君だつて本部長として仕事は限りない。だから、何の重荷も無い私が出来る限り頑張るわ」

「……医者性の性分なのかな。それは。冴城がそういう人間なのはもう重々承知してるから何も言わないが。」

医者の不養生で笑われないように、お前も自愛しろよ」

「もちろん。それじゃ、またね」

鞘朽第八支部、支部長。冴城恭子が車に乗って帰っていく。死人ばかりの領域^{エリア}へと。

鞘朽本部、本部長。高遠圭一が車に乗って帰っていく。死人ばかりの領域^{エリア}へと。

死人が歯車を回す矮小世界、鞘朽へと。帰っていく。

#06:Alicohol(酒宴談遊)(後書き)

どうも、秋折紀織です。

キャラが多いのは困りますね。マンガだったら絵で描きわけるだけですが、
文字だけで8人を動かすのはかなりキツいなあ……。
一人称や口調、人の名前の呼び方などで何とか区別つけてみてください。
さい。

高遠圭一タカトオ ケイイチ：本部長。日本政府へのコネを持つ。一応リーダー的存在。
御東弑次ミラツマ イチジ：第二支部長。全身を赤い装いで纏める。推定解理者を探し当てる超能力者。

襟鳴静流エリナキ シズル：第三支部長。エセ関西弁の和服フェチ。ロリシヨタ大好き。
宮眺江一也クナガエ イチヤ：第四支部長。へたれ系インテリ。

遠宮和叉トオミヤ カズサ：第五支部長。武士系武闘派。宮眺江とは意外に仲が良い。
久世克樹クゼ カツキ：第六支部長。クール系。黒なイメージ。星村に惚れている。

星村歩ホシムラ アユミ：第七支部長。楽天家系空気読める人。久世とは仲が良いのだが、微妙な関係。喉に後天性な障害を抱えており、いずれ喋ることが出来なくなる。
冴城恭子サエギ キョウコ：第八支部長。天才系常識人。

簡単に人物像を並べるとこんな感じか。
鞘朽はこの八人が必然だったり偶然だったりのお陰で巡り合ってきたモノ。

馴れ合いの仲良しグループだが、それで問題無いと皆が思っている。

感想等いただけると嬉しかったです。
では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6197c/>

飽くなき赤色-Red Fraction-

2010年10月20日19時04分発行